北朝鮮發見の古鏡

梅原末治

一

北朝鮮に於ける漢の郡縣の故地から出土する古鏡の一般支那古鏡鑑研究上に持つ重要な意義の一つは、内に學者が充分な學術的用意を以て發掘を行つた結果見出された遺品を含み、從つてこれまで支那本土で古鏡が如何なる遺品と共存し、また副葬品として如何なる性質を有したかに就いて明確な資料を缺き、我が内地の場合でも同じ憾みの少くない處から來る研究上の大なる闕陷を補ふものゝ存することであり、また其の出土遺跡の營造の年代が大體に於いて前漢中葉以後魏晋の間の局限せられることから、出土古鏡を通觀して、各の形式の間に於ける前後を定め、また相互の關係を考察することに依つて支那古鏡鑑の年代研究上に一つの重要な寄與をなすのをも數ふべきであらう。而して吾々にとつてなほ一つ感興を惹くのは北鮮の出土品と我が内地出土支那鏡との比較研究に依つて齎すところの上代に於ける兩者の文化關係の考察なのである。私の北鮮出土の古鏡に對する調査

は、この第三に擧げた內地出土品との比較に發足したのであつて、もと故富岡先生の慫慂に基いたのであるが、大正七年秋の最初の朝鮮旅行に於ける知見から其の綜括的研究を志し、機會ある每に資料の蒐集につとめることにした。かくて大正九年秋には親しく遺跡地を訪うて、遺品を探り、本年の春更に平壤に出掛けて昨年來見出された多數の古鏡を實査して、著しく知見を擴め、北鮮出土鏡の性質を髣髴し得るに近いものあると共に、一般支那古鏡鑑の研究にも緊要な事實を示すものあるを認むるに至つた。たゞ此の調査に當り最も遺憾としたのは、關野工學博士、谷井文學士の一行が朝鮮古蹟調査の第一着手として樂浪帶方の遺跡の學術的發掘を行つて多數の貴重な發見を齎された大正五年秋の調査の結果がなほ纒まつて發表せられてゐない爲に、伴出物からする古鏡研究に對してなほ大いに資料を缺くの點である。私は今ま嚮に總督府から公刊せられた「古蹟調査特別報告」第一冊收むるところの「平壤附近に於ける樂浪時代の墳墓」等に見ゆる簡單な記事に依り、一方手許に集め得た古鏡百餘面を整理して、出土古鏡の性質を學界に紹介すると共に、其の一般支那古鏡鑑研究に關する寄與と、內地古鏡との間に見ゆる異同を比較して兩者の關係に考察を及ぼしたく思ふ。

記述の順序としてやゝ蛇足の感はあるが、初に北朝鮮に於ける古鏡發見の歷史と其の遺品の收藏者とに就いて數言を費し、また遺跡に及び、然る後遺品の一々を紹介することにしやう。

二

さて今日存する北朝鮮に於ける漢民族の遺跡から發見せられた古鏡は、すべて明治四十年代古蹟調査の開始せられた以後、平壤を中心とする地域から出土したものであつて、それ以前に於ける遺品は一も傳ふるところがない。けれども古鏡の發見の、それよりも遙かに遡つた以前にも存したことは、李延龜の月沙集卷三十三に載する「箕城古鏡記」に依つて證據立てられる。該記文は明の萬曆庚申即ち泰昌元年(西紀一六二〇)の十一月九日に平壤府の正陽門外にて趙洽なる者の發見した一面の古鏡に對する銘文の考證であつて、二十字の銘文が割合によく釋讀せられて居り、鏡の形式も神獸鏡の類ではなかつたかを考へしむる點などのある珍らしいものであるが、其の前後の發見の歷史など固より明ではない。

明治四十年代に本邦學者の手に依つてはじめられた學術上の調査に於いては、平壤の對岸大同江面に無數に散在してゐる墳壟を以て漢の郡縣の遺跡であると最初に斷じた鳥居文學博士の調査の分からは鏡の出土を見なかつた樣であるが、それと前後して同じ地域を踏査した關野工學博士、谷井文學士等は明治四十二年の秋同地石巖里の一塼墓を發掘して精良な長宜子孫內行花紋鏡と青盖盤龍鏡を見出され、また他の分から珍しい鐵鏡を發見し、ついで其の冬萩野文學博士に隨行渡鮮の今西文學博士また同地の一塼墓を發掘調査、同じく長宜子孫內行花紋鏡一面を獲て共に內地に齎らし、前者は東京帝國大學工科大學に、後者

は同文科大學に收藏することゝなり、朝鮮出土鏡研究の上に最初の確實な資料となつた。

大正五年朝鮮總督府が新たに古蹟調査委員會を組織して、大規模の遺跡の學術調査を開始するや、其の秋第一着手として、關野博士の一行が再び大同江面の古墳群の發掘調査を行ひ、一ヶ月半に亘る期間に十基の古墳を精査、その中から豐富な各種の遺物と共に八面の優秀な古鏡を發見し、更に翌年文學士谷井濟一氏は黃海道鳳山郡文井面及び楚臥面の帶方の遺跡と考へらるゝ古墳群からも二面の遺品を發掘して、學術的價値の多い遺品を著しく豐富にした。此の前後から平壤在住の內地人の間に、是等の古墳出土遺物に關する興味のめざしを見ることになつたが、中に於いて故山田鈔次郎氏最も熱心に其の蒐集に努力して、土人が耕作中偶然見出した遺品は小片に至るまでもこれを買集め、大正九年秋余のはじめて平壤調査の際には收藏品の總計が千を超ゆると云ふ夥しい數に達し、內に「樂浪太守章」「訥邯長印」の封泥や樂浪禮官の古瓦、半兩の錢笵等の貴重な資料を含み、古鏡の形の全いもの十面に近く、破片に至つては十五六面分にも達した。此の年平壤府の東方、川を距てた炭鑛線船橋里驛の擴張工事あり、また新設せられた飛行第六大隊の引込線工事等相次いで起り、此の間に前漢永光三年の銘ある銅鍾と同時に古鏡片四面分の出土あり、他方大同江面梧野里の煉瓦土取場に地下深く存した古墳が、漸次掘り出されて多くの遺品が發見せられた。是等のものは如何なる故にや埋藏物として取扱はれず、從つて世に紹介せらるゝに至らなかつたのであるが、一昨年秋故山田氏の遺品全部を總督府に購入したことゝ、其の前後關野工學

博士等が再三樂浪遺跡を調査せられた事實とは、同地人士に非常な刺激を與へて從來顧みられなかつたものが、漸次關口、白神等收藏家の有に歸することゝなり、遺跡の探訪者多きを加ふると共に、本年に入つて遺物採取を目的とする盜掘を見るに至り、其の結果僅々二ヶ月の間に三十面に近い多數の古鏡が世に出ることゝなつた。古墳の盜掘の流行は學術的見地からして大いに排斥すべきことであるから、平壤警察署が嚴に取締りの法を講じて、禁を犯す者を罰し、出土品を横收して總督府の調査課に送致するの方針を取りつゝある。然し散佚して轉々の後平壤の好事家の手に歸したもの寧ろ大部分を占め、今ま同地の關口、橋都其他諸家の藏品となつたもの併せて六十面を超ゆるの有樣であつて、まさに近時に於ける最も著しい考古學上の一事實と云ふことが出來る。

如上の北朝鮮――特に大同江面に於ける鏡を副葬した古墳の構造如何の問題は今日未だ充分な研究の結果が發表せられてはゐないが、概括すると塼を以て墓室を築いたものと、木棺槨を主とした二種の違つた式が並存してゐたことが察せられる。明治四十二年に發掘調査した三基は何れも塼築の塚であつたが、大正五年秋に遺品を出したのは何れも木棺槨を主體とした式であつて、中で第九號墳と命名せられた一は底部に栗石を敷き詰め、また第六、第二の兩古墳は槨を包むに塼を以てしてゐた。谷井學士が翌年調査して鏡を發見した鳳山郡文井面及楚臥面の古墳は塼築に係ること上記の一と同じく、而も架構の立派なものである。これ等に對して上記の數年來多數鏡を發見した塚の構造は遺憾ながら、それが

偶然の發見若しくば盜掘に基くものであるが爲に、殆んど究められない次第ではあるが、察するに、其の大部分は塼築の墓室を有するものであつたと解せられる。大正五年の秋に行はれた大同江面に於ける十基の古塚の發掘の結果から推すと、塼槨の墓室は眼に着き易く、且つ主體が空洞の室から成るので發掘も容易であるに反し、木棺槨の式は、主要部が地下深く存するを常とするから、耕作などの際に掘り當ることの稀なるは勿論、盜掘者が中心を探求發掘することも難い感がある。これを實際に就いて見るも、石巖里に於いて近頃盜掘した古墳が多く塼墓であることや、過去數年間に三四十面の古鏡を發掘した大同江面梧野里煉瓦土取場の遺跡の如き、現に形骸の一部分をとゞむるもの、大半が塼築であることからも推測せられる。此の梧野里の土取場は古鏡の多く出た遺跡として吾々に著しく興味を與へる處であるが、實地に就いて檢すると、地は戊辰川と貞柏里から出た小川の流れとの間にある一種の沖積層と見るべく、附近一帶低い畑をなして、表面に墳墓の存在を物語る樣な何等の形迹もない。而も現に東西三丁餘、南北一丁半程に亘り、深さ六七尺に粘土を採掘した凹所があり、該底一部には隨所に塼片の堆積が見られ、土器の破片等を伴つて、何れも本來一の小墓室をなした事を示してゐる。余が本年五月該地域にて矚目した塼槨の址は約十個を數へ、外に新しく木槨を掘り出した處と、栗石を使用した墳墓址二個のあることをも確めた。而して各墳は互に相距ること十間內外である。吾々は右の事實に依つて、廣く大同江面一帶に散在する封土のある數百の墳壟の外に、地表面下に埋沒してゐる遺跡の更に多數

なる可きを推測すると同時に、他方其の墳墓の塼築に係るもの大部分を占むることをも想定し得ると思ふ。塼築の墓が支那の本土にて漢代に盛行し、當代の代表的墓制をなしてゐたことは今ま改めて云ふまでもなく、これを從來發掘調査せられた處に見るも南滿洲、印度支那等彼等の植民した處にその式を見る次第である。北朝鮮に於ける右の事實は內容と相待つて、其の漢人の手になつたことを最も雄辯に物語るものと云ふことが出來るであらう。其の塼墓及び木槨墳の構造の細部に就いては上述「古蹟調査特別報告」の圖版、其他關野博士の「六朝以前の墓塼に就て」(考古學雜誌六ノ一一)「新に發掘せる樂浪時代の古墳」(同八ノ一)等を參照すべきである。

出土墳墓の形式について次に起る問題は、それ等の槨內に於ける鏡の副葬の位置如何と云ふことである。これは鏡の副葬品としての性質を考へる上に密接な關係を持つ事項として最も緊要なものであるから、出來るだけ多くの場合を取つて檢したいが、偶然の出土や、盜掘の古鏡からは到底それを究明する資料を得らる可くもない。從つて今ま右の考察に役立つものは朝鮮古蹟圖譜第一に載する塼墓の一例と、古蹟調査特別報告錄する所の木槨を主體にする四墳とだけに限られるのは、蓋し不得止の次第である。塼室の實例は明治四十二年關野博士一行の發掘した石巖里古墳の實際であつて、博士の圖に依ると、前後の二室から成つた東面の墓室に於いて、鏡は奧室の方の入口に近い、北側に大小二面相並んで存したことが知られる(同圖譜第二六、第二七參照)。木槨の場合は何れも被葬者を納めた棺の外にあ

つて、其の貞柏里第三號墳の場合は、一は棺の向つて左側に漆盆、劍と並び存し、他の一面は棺の奥の方に置かれてあり、第六、第二の兩古墳にありては何れも槨の一方に偏して木棺あり、他の部分に副葬品を納めた部分を存し、二者共にこの中に鏡二面を置いてゐた。十基の中で最も豐富な副葬品を出した石巖里の第九號墳に於ても、其の棺内に存したのは玲、充耳、璧、玉豚等の玉器と、劍、刀子、指輪、鉸具、玉印等の裝身具、其他の貴重品に限り、鏡は二面とも棺外の一隅から各種の土器、銅容器、漆器、武器、馬具、家什の類と共に見出されたのである。塼室の場合は單に一例であるが、後の四者の示すところ、何れも鏡が二面宛で、それが悉く棺外にあり、他の器具と共存したことに於いて全く一致してゐるから、それに依つて當時割合に多く行はれた鏡の埋葬狀態の一つの場合を推することが出來るであらう。こゝに現はれた狀態は、内地の古墳に於ける鏡の發見位置との間に著しい相違を示すものとして、吾々の關心に上るが、それは別に論及することゝして、斯くの如き現象から極めて不充分ではあるが、當代人が鏡を埋葬するに當つて、それを土器、刀劍、容器、馬具などと同樣に取扱つてゐたこと、換言すれば當時日常の必要品の一として副葬したのであつたらうことが推測せられて來るのである。此の肯定はそれが支那移民の墳墓でありとすることに依つて、鏡自體に表はされてゐる辟邪其他の思想とに交渉を生じ來り、本來かゝる意義を有するものが墳に埋葬せらるるに及び、何が故に單なる副葬品として取扱はれたかの興味ある問題に觸れるのであるが、前段のすべてが不充分な資料から發足した推測であるから、これ以上に考察を進めること

は困難である。從つて他日の機會に讓り、項を改めて一々の遺品を擧げることにしやう。

三

既に記した如く北鮮發見の古鏡で、今日まで調査したもの實に百二十餘面の多數あるが、これを形式に依つて分つと長宜子孫內行花紋鏡の系統に入るもの最も多く、TLV字系の細線四神鏡これにつぎ、兩者で出土鏡の半以上を占め、この外に夔鳳鏡、盤龍鏡、半肉刻神獸鏡、同獸形鏡、畫象鏡等がゴシック式鏡、星雲鏡等と共に存するのである。今ま先づ最も著しい二類からはじめて個々の特徴を見よう。

(一)內行花紋鏡。

此の形式に屬する遺品で吾人の囑目したもの四十面を超え、その所在明にしてなほ見るに至らないもの數面あるから、現存品は五十面に達するであらう。かく數が多いから、中に文樣の配置に繁簡種々のものあるが、內行花紋と鈕座の周圍に四字銘を配することゝは何れにも共通であり、大體に於いて帶圈の加はつた複雜な式は大形品に多く見られる。

其の最も簡單な式は石巖里發見の二例で、その一は一面は橋都氏藏(徑三寸三分)、他は朴永弼の發掘品にして今ま博物館に保管するもの(面徑三寸四分弱、緣一分、面のソリ八厘)、共に鈕の四葉座とそれを繞る內行八弧紋とで內區を形成して、內に「長宜子孫」の銘を置き、直ちに幅廣い緣に續くところ、西淸續鑑甲編卷十九載する處の漢長宜子孫鑑二と全然同一の式で、線

劃鋭利、見るからに古式の感がある(圖版第二の1に示すは橋都氏の藏品)。關口氏所藏の梧野里土取場出土の一鏡また同式ではあるが(徑四寸三分五厘、緣厚一分二厘)、形大きく四葉紋稻形式化し、銘文また前者の整美なるに及ばない。それの更に著しい類には同じ所から出た關口氏藏品の四葉座の一々が蝙蝠樣となり、銘文の「長生宜子」とあるものや(徑約三寸五分、圖版第一の1)、助王里發見橋都氏所藏(徑三寸五分七厘)の文樣が形式化して「位至三公」の銘あるもの、總督府博物館所藏故山田氏蒐集品、徑三寸六分、緣厚一分、面のソリ六厘)の葉座の尖つて兩側にまるい膨みを加へ、銘字の太く大形となり而も體の崩れた類などがある。其の二は鈕座紋と內行花紋帶との關に一の突帶を加へた式であつて、平壤多田氏所藏の石巖里出土品(徑五寸一分五厘)、稻葉氏所藏の貞柏里土取場出土の徑六寸ある白銅鏡、關口氏藏の梧野里土取場發見に係る「長宜官君」の銘ある鏡(徑四寸四分)の如きを其の著しい遺品とすべく、中にて稻葉氏のそれは內區の四葉をはじめ彫鏤の鋭利なる點に於いて見るべきもの(圖版第二の2)、石巖里發見橋都氏藏品(徑四寸五分餘)は蝙蝠形座鈕の式に一帶を加へた類であつて、銘文また「長生宜子」とあり、書の體優れて、製作稻葉氏のそれに比すべきものがある(圖版第二の3)。關口半氏藏梧野里發見の一鏡(徑三寸一分二厘、緣厚一分、面のソリ同上)と貞柏里出土白神氏收藏の破鏡(徑三寸一分、緣厚一分)とは第一に擧げた式よりも單簡なもので、圓座鈕に一圈繞り、直ちに內行花紋帶となつたもの、而して關口氏の分は花紋の數が七個であるのを異例とする。總督府博物館所藏故山田氏の蒐集品また簡單な一例であるが、この方は蝙蝠形

の葉座が擴大して、其の間に「長宜子孫」の銘を大きく配し、內行花紋帶を省いたもので、濱田博士が嘗て旅順刁家屯の一古墳から發見せられたものに似てゐる(徑約二寸八分、緣厚九厘)。第三は第二に加ふるに內行八弧間に圓圈を以てした類であつて、石巖里にて朴東華の發掘した一鏡(徑四寸六分、緣厚一分、厚手)は鈕座の葉紋蝙蝠狀を呈し、其の間の銘「長生宜子」にして、後者の圓圈は葉紋の尖端に對する四ヶ所に限るもの(圖版第一の2)、關口氏の一鏡また相似てゐるが(徑三寸七分)、花紋帶間の圓圈樣のものは內の銘字と相對し、葉紋の尖端は帶を通じてこの部にまで及び、文樣のすべてが朦糊としてゐる。同じ石巖里の古墳から金汝周の發掘した一鏡(徑四寸一分五厘、緣厚一分二厘)は內行花紋の各の間に中央に珠點を容れた圓紋があり、內區の蝙蝠樣の圖形は兩端肉太となつて、銘は「位至三公」とある。この類であつて圓圈に代ふるに一部銘文を以てしたものに、第四の石巖里の出土品二面を數ふ可く、朴孝心の發見品は徑六寸一分の白銅品(緣厚一分五厘、面のソリ一分)で、內行八弧の間に圓圈と交互に「生如山石」の四字銘があり、內區の「長宜孫子」の銘は大形となつて巧みに文樣化されてある(圖版第一の3)、關口氏所藏の他の一面また同一であるが、これは徑四寸二分で小さい。田增關一君所藏の一鏡(徑五寸八分)は朴孝心の發掘鏡に比すべき精品に屬し、八弧間に「君宜高官位至三公」の正しい畫で表はされた銘文があり、そのまた松斗漢の石巖里で一面の鐵鏡と共に發掘した徑八寸三分五厘(緣厚一分四厘)の大形白銅鏡も同じ式で、內行八弧間の銘文は「千秋百福上得天力」とある。圖形簡單ではあるが、優秀な作品である(圖版第一の4)。以上は單簡

な內行花紋鏡の形の全いものを數へたのであるが、總督府の博物館に藏した故山田氏蒐集の鏡片中には同式の緣の破片三と內區の一部片一とがあつて、前者の原徑が四寸六分五厘、六寸二分、三寸二分であつたことを示してゐる。

構圖の割合に單純な如上の諸類に比べて、次に著しい一類をなすのは、四葉區と內行花紋帶との間にある突帶の內側に櫛齒紋帶を置き、更に素緣と八弧紋との間に兩側に同じ櫛齒紋の添うた一種の渦樣節狀線條紋帶も表した長宜子孫內行花紋鏡であつて、大形品に其の例が多い。明治四十二年に石巖里の古墳で關野博士一行の發掘した內行花紋鏡(七寸五分)と、近く同じ場所で朴東華の發見した遺品(徑七寸六分、緣厚二分七厘、面のソリ一分五厘)とは其の最も著しいものであつて、兩者共に四葉座の鈕が著しく大に、內行八弧の間に配する銘は「壽如金石佳且好兮」とある(圖版第一の5は其の後者である)、大同江面の第六號古墳から出た一鏡は徑六寸七分のやゝ小形のものであるが、また同じ式に屬し文字は纖麗である。梧野里の土取場から出た關口氏所藏の一面(徑四寸七分、緣厚二分)は更に小さくて內側の突帶に櫛齒紋がない。同じ類で右の諸品と少しく違つた式は內行八弧間に配する銘文が「壽如金石」の四字のみで一種の草樣紋と交互に配したもの、大同江面の第二號墳から出た徑六寸九分五厘ある一鏡は刻線の細い點を見るべく(圖版第一の6)、昨年九月の震災で亡なつた東京大學文學部の舊藏品(徑六寸八分餘)また同じ式であつて、黑漆色をした美しい鏡であつた。其の三は八弧間に銘がなくすべて草紋を以て飾つた式で、これは從來の發見例が最も

多い。先づ大きいものから擧げると、大同江面の第九號墳から發見した二面は共に本式であつて、一は徑七寸三分五厘、他は六寸二分を示し、後者の櫛齒紋は何れも斜行に屬し、前者は特に線刻が細密整緻である(圖版第二の4)。大正九年秋船橋里に於いて永光三年の銅鍾と共に發見した一鏡は徑七寸六分ある此の式の大形品緣厚一分三厘、面のソリ約一分)に屬し、鈕の周圍厚く、今ま表面水中古色をしてゐるが、破碎面を見ると白銅質を遺存する佳鏡である。橋都氏の所藏に係る徑六寸七分五厘の一鏡、關口氏藏の梧野里土取場發見の二鏡(一は徑五寸二分弱破損あり、他は五寸一分五厘、面のソリ一分の完品)また全く同じ式で、後の二者は上記九號墳の一と同じく櫛齒紋が斜行となつてゐる上、形がやゝ小さい。今ま形の全い一を圖示したが(圖版第一の7)、整濟な構圖である。橋都氏藏するところの貞柏里と石巖里とから出た同式鏡は構圖が少しく簡單となつて內突帶に櫛齒紋帶の添ふるなく、內行八弧間の草樣紋の一ま た渦紋若しくば圓圈をなすもの、前者は徑四寸三分餘(緣厚二分四厘、面の反り六厘)にして黑漆色を呈し、後者は徑四寸八分、全面濃橄欖色をした古色のまことに掬すべき遺品である。なほ故山田氏の蒐集に係る破鏡中にも似た類がある(推定徑五寸一分、緣厚一分五厘)。更に簡單な遺品としては平安南道廳の所藏に係る梧野里出土品(徑約五寸四分、緣厚二分、面のソリ七厘)が內行八弧間に草紋なく、また渦樣節狀線紋帶の內側の櫛齒紋帶を缺けるもの、同じ地域から出た白神壽吉氏の藏品(徑三寸五分、緣厚一分三厘、面のソリ一分)は內行八弧間には簡單な草紋を見るが、鈕が圓座の式で銘文がなく、鑄上つてから文樣の上

面を削磨した痕の認められるもの(圖版第一の8)、大正十一年に關野博士が土城里で購入した一鏡(總督府博物館藏、徑三寸二分五厘、緣厚二分)に至つては圓座鈕に接して直ちに內行八弧紋を置いた最も簡單な式である。

是等の諸鏡の外に內行花紋鏡の特殊の式と見るべき遺品一面が石巖里から見出されてあつて、今ま白神壽吉氏の有に歸してゐる。これは面徑約四寸の極めて薄い作りの漆黑色鏡である。背面の構圖は小形の鈕を繞り匕面をなす一條の突帶があり、內區は該帶の周圍に突線から成る八弧の簡單な文樣を現はしたのみで、他に何等の裝飾を加ふることなく、外區に至つて一段隆く、それから緣に至る間の內面に刳り方を加へ突起緣をした珍らしい式である(圖版第二の5)。そして面にはいさゝかの彎曲もない。この鏡と同時に發見したものに、次に擧げるTLV式鏡の特殊形品一面(關口氏藏)と銅劍二口とがある。今ま便宜其鏡を併せ記すると、これは破片ではあるが復原徑三寸七分、緣厚一分二厘あつて、面の直なこと、緣の內側が刳つた式であることは、極めて薄い黑漆の精品であると共に前者と一致してゐるが、緣端に若干の幅を有し、內區に割合に複雜な文樣を配したところに特色がある。尤も鏡背には帶圈の設けなく、鈕を繞る匕面取りの方形格から緣に至る廣い間に、外緣の四方から斜行のT字形を置いて主文樣とし、空間を埋むるに寶珠形、曲線渦紋、珠點等を以てしてゐる。是等文樣の分子の配列には規矩がある樣ではあるが、本鏡にあつては內區の半以上を失ひ、且つ表現丸味を帶びてゐるので明瞭を缺く點がないではない(圖版第三の13)。それは兎

も角として二者共に注意すべき鏡である。

四

次に遺品の多い內區にTLV字を配した四神鏡並に其の系統に屬する細線式表現の諸鏡に於いて、大さと製作との點から先づ吾々の注意に上るのは、大正五年秋大同江面の第二號墳から見出された青盖盤龍四神鏡であるが、なほ流雲紋四神鏡、波紋四神鏡等にも見るべきものが少くない、そして各種の細線表現鏡に至つては小形品に優れたものがある。

(二)青盖盤龍四神鏡

面徑七寸八分ある良質の白銅鏡であつて、彫鏤精妙の域に達したもの、鈕を繞つて有節重孤紋帶があり、內區は二つの部分から成つて、內帶には鈕を胴部になぞらへた二双の所謂龜龍—これは實は龍虎を表はしたものであらう—の上半身を相向ひに半肉刻に表はし、外帶には鋭利な四葉座乳七個の間に青龍白虎玄武朱雀の四神形と、麒麟にさも似たる獸、龍形、馬に駕した人物像を配して、其の青龍には日を表象する烏、白虎の前には月を表象する蟾蜍を置き、空間を埋むるに、各種の烏形を以てした整美なもの、そして一段高い外區には一種の草葉紋が連續配置せられて前者に相應してゐる。銘帶にある銘また

青盖作竟大毋傷。巧工刻之成文章。左龍右虎辟不羊。朱鳥玄武順陰陽。子孫備具居中央。長保二親富番昌。壽敝金石如侯王。

と七字句から成る見るべきものである(圖版第二の6)。

(三)流雲紋四神鏡

TLV字形を內區に置き細線式表現をした四神鏡中に於いて最も著しい一類をなすもの、同式の遺品が今ま三面見出されてゐる。一と二とは平壤中學校に保管する大同江面船橋里驛の北方からの發見品であつて、前漢永光三年の銅鍾と伴出したと云ふ事實が吾々の興味をそゝる。其の一は破碎して、現存するのは僅に外緣の半ばと內區の一小部分とに過ぎないが、原徑五寸九分(緣厚一分七厘)あり、四葉座鈕を繞つた方形格には十二支の文字を配し、內區TLV字形の間に刻し出された四神其他の圓形の大きく且つ精緻なことは、前者同樣に月を表象する蟾蜍を描いた現存白虎と獨角獸形とに依つて容易に見ることが出來る。銘文の遺存するもの「好上有山人不知」の七字であるが、これを構圖と對比して推測すると、全文は恐らく故富岡氏所藏の泰山四神鏡(古鏡の研究圖版第四所載)に似たものであつたらう。二は前者よりは小形で(徑四寸七分餘、緣厚一分五厘)、內區の構圖簡單にやゝ形式化の傾向を見るが、龍虎、玄武等の形が明に認められ、其の銘帶には立派な隷書を以て六字句の左の銘がある。

上大山見神人。食玉英飯澧泉。駕蜚龍乘淳雲。宜官秩兮。保子孫□□天。

外區の流雲紋また整齊な點に於いてまさに佳鏡の一と云ふことが出來る(圖版第三の1)。

其の三は石巖里古墳から鐵器と伴出した關口氏の藏品である。此の鏡徑四寸九分に近く、

同式通有の形態なるも、鈕の四葉座とこれを繞る方格とが大きく、內區の四神其他の圖形が便化し、外區の流雲紋また異形化して整つてゐない。銘文は次の二十一字から成るが省畫が多く、書體また到底前者に比ぶべくもない(圖版第三の2)。

尙方作竟眞大巧。上□仙人不知老。王示王白食壽□□。

外區に流雲紋のある細線式鏡は右の三面の外になほ關口氏所藏の小破片が二あつて、もと徑三寸三分の一鏡をなしたもの。この鏡の緣は三角緣であつて、內區に配したのは鳥紋であつたらしい。

(四)波紋系細線四神鏡

本形式は前者の流雲紋に代ふるに兩側に鋸齒紋を添へた波紋帶及び類化の幾何學的紋を以て外區を飾つたもの。北鮮では割合に遺品が多い。(1)關口氏所藏梧野里土取場出土の一面(復原徑五寸七分餘、緣厚一分四厘)は破片ではあるが、其の最も整美した遺品の一と云ふ可く、簡單な四葉座鈕を繞る方格に十二支の文字を配し、內區の四神等の圖形が鮮かに且つ鋭い凸線で表はされてある。銘文は今ま僅かに

上有仙人不知老。□汝王泉□□食棗□

等をのこすに過ぎないが。書體は整つてゐる(圖版第三の3)。(2)平壤中學校保管の船橋里發見の破片は內區を缺失、今ま存するのは僅かに緣の一部に過ぎないが「大巧上」の銘句がある處から見ると同じ式であつたらうと考へられる(復原徑五寸四分、緣厚一分四厘)。(3)大正五

年の秋大同江面の第六號墳から出た一鏡(徑五寸二分、銹化やや大なり)は內區に於ける四神圖の便化は流雲紋四神鏡の第三に擧げたものとほゞ似た程度にあり、たゞ方形格大ならず、內に一種の直線紋帶を配し四葉座また簡單なると、銘帶が幅廣くて、こゝに長い銘文がある。

尙方作竟莫大好。上有仙人不知老。渴飲王泉汎食棗。子孫備具長担保。樂母□□

飲、飢を次汎に作るところ上述(1)の鏡のそれに等しく、且つ彼の殘存文字がこれと一致するから、前者の全文またこれに類似のものであつたらうと思はれる(同圖版の4)。(4)梧野里土取場發見に係る關口氏の藏鏡の一また相似た類ではあるが、これは外區の中帶の波紋なく、鈕は圓座で銘帶は省劃の多い文字を以てまばらに配したもの、

尙方作竟眞大巧。上有山人不老兮。

の短かい文である。なほ此の鏡方格LV字銘帶以外に水銀沫して、黑漆の間に特殊な色澤をしたことが目に着く(徑四寸八分、緣厚一分一厘)。(5)山田財次郎氏の蒐集に係る破鏡の一は徑三寸六分の小形であつて銘帶なく內區に大形の四神を配したもの、今ま存する白虎の一部は型流れはあるが、獸形としては整つてゐる。

(五)獸帶紋細線四神鏡

關口氏所藏の梧野里土取場出土品の示すところ、徑三寸八分五厘の厚手(緣厚一分七厘)、良質の白銅鏡であつて、今ま美しい黑漆色を呈する。內區に配する四神其他の圖形は上記波紋式の(3)以下に見るよりも便化の度の多い單簡な式ではあり、銘文また「呈氏作竟莫大巧上

山」の九字に過ぎないが、其の書體見る可く、特に一段高い外區は薄肉凸起を以て文様化した優れた獸帶を飾つてゐるところ、博古圖卷廿八載する「漢有善銅」の銘ある漢清明鑑二(徑三寸七分)と相似て價値がある(圖版四の1)。

以上は細線式四神鏡で形のほゞ復原し得る類を數へたのであるが、同式の斷片に至つてはなほ少なからず存してゐる。其の著しい破片を數へると、總督府博物館所藏の故山田氏の蒐集品中には波紋四神鏡の外緣のやゝ大なる破片四面分(復原徑(1)四寸八分(2)五寸五分(3)五寸三分(4)約六寸)と、內區の構圖の見られる破片凡そ五面分とがあり、後者の一には立派な朱雀が表はされてゐる。白神氏所藏の緣の破片二個また同じ式の而も精良な作品であつて、其の一には銘帶に「大」の字を遺存し、共に平緣の幾何學的文様の表現頗る鋭い。一は復原徑五寸、緣厚一分五厘、他は徑五寸八分內外である。關口氏所藏の大同江面土城里渡場附近發見の內區の破片は、該部の主圖形たる四神がTL字の間に挿まり大きく表はされた式に屬し、現存の虎の形頗る見るべく、なほ石巖里から出た小破片は內區TLV字間に車輪狀の座を具ふる乳を置き、遍く空間に蕨狀紋を配する處、泉屋清賞鏡鑑部第十二圖載する「日有熹月大富」の銘あるTLV字式鏡と全く同式に出で、其の整濟なる點に於いて時代の古さを思はしめるものがある。平壤中學校にも波紋式外緣の破片一個(徑四寸七分)を保存してゐる。以て四神鏡の割合に多かつたことが知られやう。

(六)TLV式細線鳥紋鏡

これは大體の構圖に於いて前の波紋神獸鏡と同一であるが、內區に配する圖形四神に代ふるに禽鳥を以てし、若しくば異形化したものに假りに附した名稱であつて、また割合に多くの遺品が發見されてゐる。其の一は平壤多田氏所藏の石巖里出土品(徑五寸一分)であつて、形式(五)の3の鏡に近いが、內區八個の圖形はすべて鳥紋から成るもの、銘文また同じく、ただ「未尾渴渝」にて終り完文をしてゐない。關口氏所藏の梧野里土取場出土のもの(徑三寸五分、緣厚一分餘)は銘帶を缺き、鳥形大きく而も異形化し、其の數またTL兩字形の間に各一を加へたもの(圖版第三の5)。(三)の同じ地點から出て今また白神壽吉氏の所藏する一鏡(徑四寸、緣厚一分三厘)は銘帶はあるが、文字の省畫甚だしく、到底解讀し得ず、內區の圖形また全く變化、去つてS字樣になつてゐるところ、恰かも我が內地の仿製鏡を見るの感がある。なほ銅質よろしからず、線の表現丸味を帶びてゐることは、緣の三角式なると共に擧ぐべきであらう(圖版第三の6)。如上の三者に比べて(四)の同じ地點から出た關口氏の鳥紋鏡は徑二寸七分、緣厚一分)の小形であつて銘帶なく、內區には單に方形格から出たT字形と雛鳥形の八禽を配し、斜行線紋から鋸齒紋帶を經て直ちに外緣となる單純な式ではあるが、構圖整ひ、表現の手法見る可く、小形の佳鏡の一に數ふ可きものである(圖版第四の2)。(五)同じ式の鏡がなほ一面關口氏の所藏品中にあるが、この方は內區にV字形も見ゆるが、型崩れが眼立つて、前者に比すべくもない(徑二寸九分五厘、緣厚八厘)。

(七)細線式禽獸紋鏡

關口氏の藏品に略同形のもの二面あつて、一は貞柏里、他は梧野里の土取場の發見であると云ふ。前者は徑三寸三分四厘(緣厚一分、面のソリ八厘)內區四個の車輪狀乳の間に兩翼を擴げた鳥形三と獸形一とを置き、銘帶なく、斜行櫛齒紋帶から直ちに一段高い外區の鋸齒紋と波紋帶とを配した平緣になるもの、此の外區の幾何學的紋はやゝ整濟を缺くの感がある(圖版第三の7)。後者またほゞ相似た形(徑三寸一分五厘、緣厚一分二厘、面の反り一分)であるが、外區の文帶が鋭く、鈕の周圍に二條の帶圈を加へ、內區の四乳は圓座形で、その間に配した圖形は龍虎と双禽との樣に見ゆるが、一部に型崩れがあるので明瞭でない。

(八)四乳双禽鏡

大同江面助王里發見の故山田氏蒐集品を其の顯著な例とする。これは(徑三寸二分、緣厚二分、面のソリ五厘)外區が平緣の素紋である上に、內區は兩側に斜行櫛齒紋帶を伴うた幅の狹い式に屬し、四乳の間に相向つた細線の双禽を配するやゝ重苦しい構圖のもの。平壤師範學校の一生徒が平安南道中和郡下道面法樺里から將來して、今ま白神氏の保管する一鏡(徑三寸二分五厘、緣厚二分餘、面のソリ六厘)は博古圖、西淸古鑑、同續鑑等の支那の著錄に云ふ四乳鑑であるが、また此の系統に入る可く、內區四乳の間に龍形から脫化したかと思はれるS字樣の圖形があつて、その間に前者と酷似した双禽を配してある(圖版第三の8)。なほ是等と全く同形の鈕一個と緣の破片一とが故山田氏の蒐集品中に現存してゐることと、後者の更に複雜となつてS字形の唐草樣となり、內に銘字を入れた大形品の內區片一の存する

のを附記すべきであらう。

(九)自餘の細線式鏡

以上の外細線式鏡として數ふ可きものがなほ三四面發見されてゐる。其の一は關口氏所藏の梧野里土取場發見の渦紋鏡であつて、徑三寸二分(緣厚一分)の極めて薄い作りの上に、內區の文樣また四乳の間に簡單な渦紋を置いたのみに過ぎないが、其の帶圈の線條紋は規則正しく配列されてゐる(圖版第三の10)。廣瀨憲二氏の藏鏡(徑三寸二分二厘)は前者の渦紋間に一個の鳥形を加へた點に於いて優るが、表現の手法は朦糊として前者に及ばない。其の二は白神氏所藏梧野里發見の四乳T字草紋鏡とも名づく可きもの。本鏡は徑二寸六分五厘の小鏡ではあるが、圓座鈕の周圍に匙面を有する一帶繞り、それからT字形を挺出して左右に花樣紋を添へ四乳を置く處、表現銳利である(同圖版の9)。最後に石巖里から出た山田氏蒐集品中にある一鏡片(圖版第三の11)は鈕の周圍に方格を繞らしたところは四神鏡の式に依るも、內區には四乳と三條の線紋とが何等のまとまりもなく置かれてあつて、外區の帶圈の整濟を缺くと共に我が內地の仿製鏡と趣を一にした作品である。

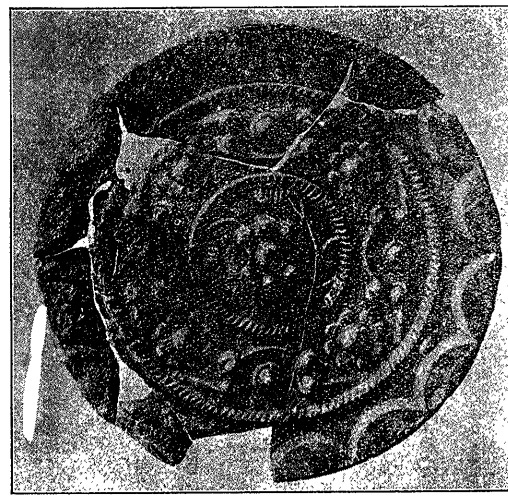
五

右の遺品の最も多い二類から、其の記述を自餘の諸形式に轉ずるに當り、數面の遺品を存する夔鳳鏡や盤龍鏡に先立ち、吾々の注意を惹くのは百乳星雲鏡とゴシック式銘帶鏡とで

ある。

(一〇)百乳星雲鏡

これは博古圖に百乳鑑として卷廿九枚乳門の第一に擧ぐる所のもの、內地に於いては北九州の筑前須玖の遺跡から銅劍銅鉾等と伴出して、今や學界に前漢代の遺品として認められた著しい形式である。此の式の北鮮にて見出された遺品は故山田氏蒐集の一面(總督府博物館藏、徑三寸六分、緣厚一分)に過ぎないが、それは石巖里の部落內の古墳から發見したもので、同時の出土品も漢式の小壺一個、金指輪三個及び金銅金具等あつたと云ふ點に於いて先づ記すべく、鏡は圖に示す如く、六個の突起した淚形乳を伴ふ特殊の鈕と內區に配する花紋樣の乳座、其の間を連ぬる淚形乳と線とより成る主圖樣が、兩者を區別する櫛齒紋の突帶と外緣の十六弧紋と共に同式鏡の特質を具備したもので、今ま銅質銹化して破損した部分もあるが、最も見るべき遺品の一である。



石巖里發見百乳星雲鏡(三分ノ二大)

(二)ゴシック式銘帶鏡

これまた故山田氏の蒐集品に存するもので、ほゞ形を存した一面と、外に素緣の一部分をとゞめた破鏡とがある。形を存する鏡は徑三寸二分(圖版第三の12)銅質銹化して褐綠色を呈し、文樣また表現丸味を帶びて鋭さを缺くが、鈕座を繞つて存する內行八弧紋帶との間に櫛形と直線紋とを置き、次にある兩側に櫛齒紋帶を伴ふ幅廣い銘帶に特殊の書體を以て十六字より成る銘文を表はしたところ、同式鏡の特徵顯著なものであり、鳥居博士が遼陽の一石棺から發掘した遺品と相似てゐる。但し銘は次の如くで、全き文章をしてゐない。

日月心忽而忠然□塞不泄內淸以昭明

(三)夔鳳鏡

現存するもの白神氏所藏の石巖里古墳發見の一面をはじめ、橋都氏珍藏の龍淵面加鵲里出土品、故山田氏の大同江面にての蒐集品及び谷井文學士の發掘した黃海道鳳山郡楚臥面養洞里第五號墳出土の破片一の四面分である。中に就いて白神氏の藏鏡は半ば缺失してゐるが、原徑五寸九分、厚さ一分を超えた厚手の作りで、質また稀に見る良好な白銅から成り、內區に配した夔鳳は巧みに文樣化せられて流麗整濟な手法を示し、それに緣取りの細線を加へ、また外區の十六葉の花紋內に一種の渦紋を刻する處、各部の表現の極めて鋭利なことと共にまさに北鮮出土古鏡中の精品の一と云ふべきである(圖版第三の14參照)。是等の諸點は嚮に守屋孝藏氏の有となつた漢永壽二年の獸首鏡の示すところと相似たことが認め

られる。即ち製作の年代を考へる上に一の傍證となるものである。橋都氏のものまた文様の鮮明な點に於いて前者に雁行し、特に鈕に一種の獸形を浮彫したところに特色がある。然し主文様たる夔鳳形になほ其の原形をとゞめ、外帶また素文なのはやゝ單形の感がないではない。銘は前者が「長宜子孫」と「位至三公」との二句あると考定せられるのに對して、本鏡は單に前句のみが糸卷形の内に區劃を附して置かれてある。面徑四寸三分に近く、面は白光と黑漆との光澤が相半して銅質のよいのを物語つてゐる(圖版第二の7)。博物館所藏の故山田氏の遺品は橋都氏のそれに近いが、より多く形式化したものであつて、質もよろしからず、今も白綠色を呈する(徑三寸一分)。但し銘は内區にもあつて「位至三公」と讀まれる。養洞里發見の破片また相似た構圖を示してゐるが、夔鳳形に緣取りの線を加へ、彫鏤に見るべき點が多い。質は黑漆をした白銅鏡である(復原徑三寸七分五厘、緣厚一分)。

(三)糸卷形飛禽鏡

新たに此の名稱を附した一類は大體の構圖上記の夔鳳鏡の式を襲うてゐるが、主文様の形にやゝ著しい相違がある上、更に帶圈が加はり幅廣い特別の緣を有した點に特色の見らるゝものである。現存四面の中、林仁普が石巖里古墳にて發掘した一面(徑約四寸六分、緣厚八厘、面に輕少の反りがある)は金索載する漢宜官鏡五とよく似た式で、擴大した糸卷形圖形の外側に配した鳥形が巧みに文様化せられて、空間も「君位至公」の銘を置き纏まつた構圖を示し、また内行十二葉紋の間に圓圈と渦紋とを表はしてゐる點に内行花紋鏡との關係の見

られるものである(圖版第一の10)。橋都氏藏の石巖里出土品(徑四寸餘)は主文樣と內行花紋との間に帶圈なく、且つ其鳥形の全く唐草紋樣化した式であり、關口氏の所藏に係る梧野里土取場出土の遺品(徑三寸五分五厘)は主文樣が一層簡單化して、たゞ一個の葉形のみが見ゆるに過ぎない。ちなみに絲卷形內の銘は第一のその「長宜子孫」であるのに對して、橋都氏の一は「君宜高官」とあり、第三は文字に代ふるに圓圈を以てしてゐる。博物館にある山田氏蒐集品は破片が小なる爲構圖も明にし難いが、第一に似た割合に複雜なものであつたらしく、內區の禽鳥はなほ形をのこしてゐる。推定の徑三寸九分に近く、厚手作りの白銅鏡である。

(四)盤龍鏡

內區に一種の大きな獸形を半肉刻にした特色のある圖形に係る。此の獸形は支那人の謂所龜龍と稱するものであるが、實物に就いて見ると本來龍虎を現はしたと解せられる。その點からすると龍虎鏡と呼ぶを適當と思ふが、北周庾信の詩に現はるゝ盤龍鏡なる名稱が廣く行はれてゐるから、今ま便宜それに從ふ。此の種の獸形はすでに上述の四神鏡の中に整美した形の現はれてゐるのを見た次第であるが、同じ形を主文樣とした遺品また北鮮出土鏡に割合に數多く存し、既出品九面に達してゐる。中に於いて博物館所收故山田氏蒐集の一鏡(徑三寸二分七厘緣は三角緣式で厚さ二分餘を示す)は內區に獨角の龍に相當する獸形を唯一つ粗なる線畫で肉刻したもの(圖版第四の4)、關口氏の石巖里發見品(徑約二寸七分及び梧野里土取場出土の黑漆鏡(徑三寸餘、圖版第五の4)は獸形二個が鈕を胴部として相

向つて配し兩者に明に形の相違が見られると共に、後者の如きは形も整つてある。諸岡榮治氏所藏の同じ梧野里から出た鏡(徑約四寸、緣厚二分七厘、面のソリ一分)は更に完美した式であつて、外區平緣に近く、こゝに鋸齒紋と波紋とから成る幾何學的文を飾り、內區の獸形は幾分奇古の風を帶び、其の相向つた足部の間に異形の人物を配すると共にまた「宜子」の銘文も見ゆる。同じ處から出て今は關口氏の藏する一鏡(圖版第四の5、徑四寸一分、緣高二分四厘、面のソリ二分內外、漆黑色)と明治四十二年關野博士發掘の靑盖盤龍鏡(東京帝國大學工學部藏)とは諸岡氏のそれに加ふるに內區の外に銘帶を以てし、半肉刻の獸形一層活動の狀を示してゐる。而して關口氏の遺品にあつては獨角の獸に對する一の體軀に斑條が表はされて、其の虎なることが何人にも認められる。銘文は此の分

成平倚竟。[以下缺]在左。白虎居右。爲吏高什。賈萬倍。長保二□。樂無已。

——(內區銘)——宜子孫。

また石巖里出土品は

靑盖作竟□賀國家人民息。胡虜殄滅天□孰。長保二親得天力。樂兮。

の文字が遺存してゐる。其の缺損した部分の中で、前者は「四夷服多」、また後者が「下復風雨時節五穀」であるべきは、他の例から容易に考へられる處である。大正四年の頃大同江面の土城里から發見したと云ふ平壤中西氏所藏の盤龍鏡(圖版第五の1、徑四寸七分餘)は完形を存した漆黑色の精品であつて、內區の龍虎形の半肉刻一層鮮かに、また一隅に配した人物の形

も面白く、外區は幾何學的文樣に代ふるに文樣化した禽獸魚形等の帶を以てしたもの。銘文また

孚氏作之竟誠淸□。服之富貴壽命長。左龍右虎扶本□。朱爵玄武赴陰陽。單于□臣□漢□。子孫番息樂未央。

とあり、後半解讀に苦しむも、中に單于、漢等の文字あつて注意と興味とを惹く。

以上の遺品に對して大正五年大同江面の第三號墳から發掘した盤龍鏡(徑四寸二分)は內區の獸形が四個から成つて、其の上方に相向ふものは共に獨角の獸形をして中央に「大吉」なる銘を挿み、下方の二者は龍虎を表はし、其の龍は口を開いてまさに魚を呑まんとしつゝあるの狀を寫して居り、また外區が一段高くて形式化した細長い四龍形を薄肉の凸線で表はして一異式である(圖版第四の6)。關口氏所藏の石巖里出土鏡は其外區に當る平緣に整濟な幾何學的文樣を配する點は上述成平倚鏡、靑盖鏡と同一であるが、完好な圓座鈕の周圍に二條の帶紋があり、內區に配する獸形は前者と同じく四つで、共に龍虎の上半身が相向ひ、中間に各五珠錢形を置いてある。銘帶は蒲鉾形をして、文は右廻りに古鏡として最も普通な、

□□□竟四夷服。多賀國家人民息。胡虜殄滅天下復。風雨時節五穀孰。得天力。

の三十一字から成る。徑五寸三分五厘、漆黑色をした良白銅鏡である(圖版第五の2)。

(五)鳳凰紋鏡

圓座鈕を中央にして四乳を配した內區に大きく兩翼を擴げた鳥形を表はした式であつ

て、概して小形のものが多く、また銘文がない。關口氏所藏の梧野里土取場發見品は北鮮發見の唯一の例であつて、徑二寸九分、面に五厘のソリあり、三角緣の高さ一分六厘を示し、外帶の紋が比較的細かい。たゞし內區の鳳凰の一部分型崩れの爲に今まやゝ明瞭を缺いてゐる(圖版第四の3)。

(六)畫象鏡

支那鏡中表現の手法に特色あり、また我が內地古墳に精品を見る此の形式は北鮮に於ける發見例が未だ多くない。其の顯著な一例は今ま平壤中學校に保管する大同江面梧野里の電氣會社構內出土の遺品であるが、惜いかな內區の殆んど全部を缺失して、僅かに疾驅した馬の下半に特殊な手法を示してゐるのと、「氏作竟卅之有倉猶居左白」「宜具」等の銘の一部分を殘すに過ぎない。然し其の外區には表現の丸味を持つた幾何學的帶圈の四方に錢形紋を配して、やはらかな感じを與へ、徑五寸四分(緣厚三分弱)、其の本來の佳品であつたことを思はしめる。近く田增關一氏の所藏に歸した大同江面石巖里發見の二面の遺品また同じ畫象鏡の系統に入る可く、一は徑四寸八分、圓座鈕を繞つて珠紋圈があり、內區大形四乳の間に特徵の顯著な龍虎と、脇侍を伴ふ神人とを表はした畫象鏡に最も多い形をとり、銘帶には二十字の銘文を存し

□氏作竟□子孫上有東王公西王母生如山石兮

と解讀し得る。其の東王公西王母の銘は、外區に連環唐草紋を配したところと共に、同式の

通有な式と見てよい。其の二はよく似てゐるが形やゝ小さく(徑四寸二分)、外區は波紋と鋸齒紋とからなり、內區四乳の間に配する圖形が神人に代ふるに玄武と朱雀とを以てして、形の整つた四神を表はした珍らしい構圖を示し、表現の手法また少しく厚肉であつて本式と半肉刻式との中間型に屬する。銘文は

馬氏作竟眞大巧。上有山人大吉兮。

とある。一部分に畫象鏡の手法を示したものには關口氏所藏梧野里土取場發見の二神二獸鏡がある。破碎はしてゐるが、完形が見られ、大さ前者と等しい(圖版第五の3)。內區四個の圓錐形狀乳の間に配した龍虎と思はれる二圖形は半肉刻の手法によつて疾驅の狀を表はして、平緣式神獸鏡の特色を持つが、他の神人の二圖形は著しく奇古の風を帶び、長袖を有する人物を伴ひ、手法全く漢代畫象石を觀るの趣があつて別個の特徵を具へてゐる。銘帶の銘文は

上吾作竟、幽湅三商、配像萬彊、統德序道、敬奉賢良、曾年益壽、富王人子。

の二十八字である。なほ緣の三角緣であることはこゝに附記して置くの要があらう。

(一七)半肉刻神獸鏡

この式また比較的發見例に乏しく、現在見られるものは梧野里土取場發見の二面(共に關口氏藏)と石巖里出土の一面(博物館保管)のみなのである。前者の一は徑四寸八分、緣厚二分八厘、面のソリ一分八厘、構圖の大體は上記二神二獸鏡と殆んど同一であるが、これは全部半

肉刻の手法で現はされてゐる。銘文は

吾作明竟。幽湅三酉。統(作思)德序道。配象萬彊。曾年益壽。宜子。

とあつて前者に近い。蓋し二者の間に系統上の連絡があらう(圖版第五の6)。本鏡と同式の遺品は內地の古墳から數多く見出されてゐる。二三の例を擧げると、大和北萬城郡佐味田寶塚、河內南河內郡津堂城山古墳、攝津武庫郡岡本のヘボソ塚出土のものがそれである。第二は內區の文樣から神人龍虎鏡とも呼ぶ可く(徑三寸二分、緣高二分)、緣は三角形に近く、二條の鋸齒紋帶と一條の斜行櫛齒紋帶から直ちに內區につゞく單簡な式で、圓錐形狀の四乳の間に配した龍虎と蒙龍樣の神人の形また相應したものである。但しその表現は幾分畫象鏡に似たところがある。石巖里發見品は林仁普の發掘に係り、上記の絲卷形鳥紋鏡と共存したもの(徑三寸六分四厘、緣厚二分六厘、ソリ七厘)であつて、外區は一段高く銘帶を缺き、內區の神獸形は梧野里出土の二神二獸鏡に酷似して更に細密の度を加へてゐる。

(六)半肉刻獸形鏡

前者と系統上の關係の密接な獸形鏡には先づ今ま京都帝國大學文學部藏する處の石巖里發見の四獸鏡(徑三寸六分、緣高二分二厘、面のソリ一分、黑漆鏡)がある。これは緣の三角式であることをはじめとして、外區に幾何學的紋を置き、銘帶から乳紋を配する內區に連なること同式に通有な構圖を示し、獸形は四個とも單簡な疾驅形で、銘文は省畫の多い體の短文十四字をあらく配したものである。

上方作竟莫大工。青龍白虎在左右。

關口氏所藏の同じ石巖里から出た一鏡(徑四寸五分)は、內區の乳數が增して、龍虎をはじめて、獨角の麒麟と見るべき獸形、鳳凰、及び獸を參ふ異樣の人物等六個の圖樣を表はして、一々の形の割合に整つたもの、而して鈕の周圍には有節重弧紋帶がある。銘文は同じく「上方作竟」ではじまつてゐるが、以下は「眞大好、青龍白虎在左右、曾年益壽宜子」とあつて前者よりも全く、且つ缺劃が少い(圖版第五の5)。故山田氏蒐集の鏡片に此の圖形のと全然同じ式の獸の現はれてゐるものがある。黃海道鳳山郡文井面松山里第一號墳發見の六獸鏡(徑四寸五分、緣厚二分一厘)また相似た式ではあるが、內區の獸形に便化の迹があり、銘文また缺畫多く、且つ中途で切れて完文をなさないものである。

□氏作竟眞大巧。上[有]山人不老。

最初の一字はこの所鑄口に當つて朦糊として讀み得ない。石巖里に於いて金汝周の發掘した四獸鏡(徑三寸三分、緣厚一分餘、面のソリ六厘)は銹化が甚だしいので構圖の不分明な部分もあるが、前三者とはやゝ趣を異にした式であつて、銘帶は外區に存し、それと內區との間に鋸齒紋を伴つた突起帶があり、緣は一種の唐草紋環狀紋からなること、支那三國代の年號鏡に見るところと同一である。而して內區の獸形は著しく大きく、體軀の各部がよく寫されてあり、其の各の間を別つ乳に代ふるに一種特別な圓圈樣の飾りを以てしたことも記すべきであらう。銘文は銹化の爲に今ま文の初の「吾作明竟莫大巧」の七字以外解讀出來ない、

が、全文三十五字内外のものと推測せられる。

(九)半圓方形帶繪紋様神獸鏡

神獸鏡の内にて構圖最も複雜となり、且つ獸形の精緻をなす此の形式は大正五年秋大同江面第三號墳に於いて大吉盤龍鏡と共存した一面を先づ擧ぐ可きである。徑七寸五分(圖版第四の7)同式として最も整美纖巧な式に屬し、我が内地出土の同形の諸鏡(下野國河内郡雀宮、遠江國小笠郡曾我村發見品等)に優るものがある。銘文は方形格に四字宛配し、全文は

吾作明竟、幽凍三商、配象萬彊　統德序道、敬奉賢良、記刻典祝　百身擧樂、衆事主陽、福祿神明、富貴安樂、子孫番昌、擧□喜□　士至公卿、見師命長。

と讀まれる。平壤中學校所藏の石巖里出土鏡は徑約四寸三分の小形ではあるが、また同形式に屬する優秀なる遺品にして、内區に配する神獸形の一部の環狀乳をなすところ、後漢の年號鏡に見るそれに一致を示してゐる。半圓方形帶の方形格は十一個あつて、其の各に同じく四字銘句が入れられてある。

内外兩區の間に半圓方形帶を配する點に於いて右の鏡に似てゐるが、而も内區の違つた遺品として特に擧ぐ可きは、近く助王里の農夫から求めたと云ふ關口氏藏の一鏡である。徑三寸六分の小形に屬し、其の半圓方形帶の個々の上には何等の刻紋なく、内區には圓座鈕を繞つて突線から成る内行八弧紋を置き、内に四個の圓紋を配し、全空間を滿すに珠紋を以てした珍らしい形であつて、内行花紋と半圓方形帶鏡との中間型を示してゐる樣にも考へ

られる。最後に

(三)鐵製鏡

の從來發見せられたものは三面であつて、一は明治四十二年に關野博士一行の大同江面の塼墓にて發見した一鏡是れであり、夙に學界に紹介せられたもの(朝鮮古蹟圖譜第一所載)、其の二は故山田氏の蒐集品中にある大同江面土城發見の半ば缺失した遺品(復原徑五寸五分、緣厚一分五厘)、其の三は最近石巖里に於いて松斗漢が上述の千余百福の銘ある大形の內行花紋鏡と同時に發掘した完形品である。三者何れも鐵質酸化し去つて鏡背に於ける文様の有無を究め難いのであるが、割合に帶圈に凸凹の少ないものであつたことは現狀から容易に想定せらるゝのであつて、石巖里發見の一面の示すところ、徑四寸餘に對して面に一分の反りあり、全面厚さ一分二三厘の間にあり扁平型をして緣に著しい突起がない。

以上三項に亘つて逐條紹介した處が、私の囑目した北鮮出土の古鏡の全部であるが、今まこれを見易い爲に一括した表を掲げ、兼ねて年代觀をはじめ各種の考察を加ふる際の參考としやう。

(一)內行花紋鏡	破片共	四十一面	細線式鳥紋鏡		五面
異式內行花紋鏡	破片	一面	細線式禽獸紋鏡		二面
(二)異式方格T字鏡	同	一面	(四)四乳双禽鏡	破片共	四面
(三)細線式四神鏡類	破片共	二十五面	細線式諸鏡		四面

(五)百乳星雲鏡　一面
(六)ゴシック式銘帶鏡　一面
(七)夔鳳鏡　破片共　四面
絲卷形飛禽鏡　同　四面
(八)盤龍鏡　九面
(九)鳳凰紋鏡　一面
(一〇)畫象鏡　三面
(二)半肉刻神獸鏡　四面
(三)半肉刻獸形鏡　破片共　五面
(一三)半圓方形帶神獸鏡　二面
同　帶異形鏡　一面
(一四)鐵鏡　三面

即ち、これを通計すると百二十面を超えるのである。

六

かくの如く列記した古鏡に就いて先づ考察を加ふべきは云ふまでもなく其の各の年代觀である。古鏡の年代考定に當つて最も緊要なものは遺品それ自體に製作年代を示す銘句の類の存することにあるが、こゝに論じつゝある北鮮の古鏡に於いては未だ一の年號鏡を見るなく、百二十面中この類に入るべきものとして、僅かに中西氏所藏の盤龍鏡が銘文中に單于及び漢などの特殊の固有名詞を含み、漢代の作品なるを推測せしむるものあるのみ。而もこれすら、銘の全文が明でない爲に適確に年代を定め得ないのである。從つて、以下試むる處の年代の考定は主として古鏡自體の示す形式に對する觀察と伴出の遺物に基く年代推測とに依るべく、而してこれに加ふるに支那本土若しくば本邦內地發見の古鏡それ自

らの示す處若しくば考古學上の事實から歸納した確實な年代觀を參照する外ないのである。

今まで出土鏡中の最も著しい形式である內行花紋鏡と細線式四神鏡との二者に就いて觀察せんか。第一に擧ぐべきは大同江面船橋里に於ける二者のそれと前漢永光三年の銘ある孝文廟銅鍾との伴出の事實であり、また大正五年秋發掘の大同江面第九號墳に於ける內行花紋鏡二面の出土したとである。前者と共存した鏡は既に特記した如く四面あつて一は內行八弧間に草紋を配した大形整美な長宜子孫內行花紋鏡、他は立派な流雲紋四神鏡二面と波紋四神鏡(推定)一面とである。元來內行八弧紋が鏡に於ける構圖の分子として最も古く發生すべき性質のものなのは先輩の夙に說いた處であつて、學者が認めて前漢代の確實なる遺品とする四乳草葉紋鏡、ゴシック式銘帶鏡等の緣若しくば內區の一部に其の實例を見ることまた顯著な事實である。從つてこれを主要文とする鏡のまた早く存在したるべきを推測せしめたが、如何せん從來發見の諸例が何れも大形整美の形式多く、小形の單式は寧ろ便化の痕を示して、內に年代を確め得べき資料に乏しく、爲に主として手法から考へて前者を以て漢末三國を中心とする時期のものとする見解を生ずるに至つた。處が北朝鮮に於いて同式の豐富なる遺品を見出したと共に、內に既に擧げた如く單簡な式から漸次複雜整美に至る諸段階を示す遺品に接することが出來、更に右の伴出物から年代の一點が推測せられるに至つたことは學界に寄與するところ鮮少でない。永光三年は云ふまでも

なく前漢元帝の紀年であつて西紀前四一年、即ち西暦前一世紀の中葉に當る。銅鐘が特殊な性質を持つたものであるから、伴出の遺品また同時代のものと推定して誤りがなからう。然らば從來三國前後の作品としてゐた內行花紋鏡の整美な式が既に早く當時に存した事を肯定せなければならない。大同江面第九號墳はそれ自らに於いて年代を確示する處はないが、其の豐富なる副葬品から推すと關野博士の說かれた如く、これを後漢代の營造とするに何人も異義がなからうと考へる。して見れば同墳から發見した完美した二面の內行花紋鏡また同代の遺品とすべく、二者からしてこゝに同式鏡の年代觀に二つの基準が得られたわけである。本文上段に一々の遺品を紹介するに當り、私の採つた記載の方法は大體に於いて該式の簡單な遺品からはじめ、漸次帶圈を加へ完備した形となつたものに及び、再びそれが省略せられた類に至るの順序に依り、そこに內行花紋樣を主とする特殊なる一形式の發達の痕を窺はんとしたつもりであつて、如上の實年代の考定に基きそれが更に意義を持つものと考へたい。尤も先に擧げた一々の遺品の示す形式の先後が直ちに實年代を示すものではなく、實際に於ては簡單な式のながく行はれたものもあつたらうし、また大形品に於いて二重銘のあるものと、單銘に草紋を加へた類との何れを先後とすべきかの如きは全く究め難く、上記する處全く便宜に從つたのである。これを遺品に就て見るも、關口氏所藏梧野里出土の內行七花鏡や故山田氏蒐集の蝙蝠樣座を主とする長宜子孫鏡の如きは簡單の內に形式化の迹をとゞめ、表現の朦糊とした處があつて、寧ろ整濟な作品におくるゝ

ものなるを思はしめる。然し乍ら圖版第二の1・2・3に示した如き類に至つては、如何にも單純にして古い面影を存し、朴孝心發見の一鏡の如きは「金索」載する處の「漢宜官竟一」と同式に近く、編者馮雲鵬が解して

此鏡內銘四字、作懸針書、與莽布相侶、疑西漢時造製。

とせるに相當るもの、されば是等の類を以て新に年代觀の基準を得た式に先立つ作品であるとするに大いなる異論がなからうかと考へる。

內行花紋鏡の古い形式の遺品として、なほこゝに附記すべきは上記の白神氏所藏の異式の一鏡である。この鏡今ま鈕を缺失してゐるが、其の簡單なる構圖に先づ製作年代の遡るを考へしむるものあり、面の水平なると緣の內側の刳り方を加へて特殊の斷面を示す處、雷文鏡、璠璃鏡等學界の認めて確實なる前漢鏡とするものと同一の特徵を備へて同じ時代の作品なるを推測せしめる。右の點からすると同時に見出された變形T字鏡また相似た特色を持つて、次に記するTLV字式鏡の先驅たるを思はしむるものがあつて興味が深い。

TLV式四神鏡の類は支那鏡中最も遺品の多い形式であつて、內に王莽代の製作たるを明證する新莽王氏四神鏡が割合に多數に存して、此の特殊の構圖が同時代に於いて既に完成したこと、またそれが後漢を通じて行はれ、漢末魏代にも及んだことは西淸續鑑、金索等に載する遺品に依つて夙に學界に知られてゐる處である。上に擧げた同式の北鮮出土品を見るに、其の形式の完備した精巧な流雲紋鏡から內區の段々と簡單異形化した類に亘つて、

相對的年代の上に可なりの距りのあることを示してゐる。而して其の初に位してゐる流雲紋の二鏡と波紋緣の一鏡とが上記前漢末の銅鍾と伴出したのであるから、同式鏡に關する從來の知見とよく一致して、形の簡單化した類は彼よりも後即ち後漢三國代の作品とすべく、形式の變化の多樣に依つて其間に割合に長い期間が考へられるのである。二三の例を擧げるならば、獸帶紋四神鏡は既記の如く其の同一緣紋のものに「漢有善銅」の銘ある遺品の存することから漢代の作品とす可く、四神の圖形に代ふるに鳥紋を以てした類にては(四)の關口氏の小鏡の如きは漢代の製作と認められるが、(二)(三)に擧げた類に至つては恐らく時代の最も下るものであらう。たゞ四乳双禽鏡並に所謂四乳鑑に至つては、後者が南鮮永川に於いてゴシック式日光鏡と伴出した事實があり、他方このゴシック式銘帶鏡が前漢代に盛行した一の著しい形式なのは故富岡氏の研究に依つて夙に確められてゐることであるから、右の類また漢の盛時の作として、前揭の諸鏡よりも年代の遡るものと考へられる。四神鏡の初に擧げた青盖盤龍四神鏡は、其の內區に半肉刻の獸帶のある點に於いて次に述べる盤龍鏡と密接な關係を持つもの、同形式の出現と其の細線にて表はされた四神が精緻を極めてゐる點から推して後漢盛時の作とするに誤りがないであらう。

前二式に次いで遺品の多い所謂盤龍鏡に就いては初に記した如く、其の最も完美した中西氏の藏鏡に單于、漢等の銘字を存し漢代の製作なるを肯定せしむるものあるを特筆すべく、また右の四神鏡の內に大形の同圖形の表はれてゐるのを擧ぐ可きである。一體此の種

の半肉刻式表現の遺品は既に早く關野博士が上記大同江面出土の「青盖作竟」の鏡」ある遺品を以て西晉の作品なりと斷ぜられ(古蹟圖譜解說)たのをはじめ、故富岡先生また同じ見解を有して、魏晉を中心とする前後の鑄造と想定せられたものである。其の基くところ、同式品は何氏作、何々作の銘を以てはじまる遺品多く、漢代の四神鏡の尙方作等の銘と著しき對照をなすことにあつて、これは漢の勢力に統一せられてゐた支那が三國を經て六朝に入り、小國家分立の世となつて、有力なる民族が各地に割據するに至つた結果、從來尙方の官工にて作られた諸種の調度品も各地にて鑄造製作せられたに依ると解して、其の銘句に重きを置いた次第であり、事實に於いても他の諸種の遺品に某氏作とあるものが西晉前後の銘文に多く表はれてゐて、これを價値づける樣に考へられたのである。從つて金索載する所の「肖氏作竟」を以て王莽代の作品とする編者の說に贊し、更にそれを局限して同式鏡を以て當代の特色の一と見る高橋氏の新說が發表せられた後も(考古學雜誌第九卷第十二號所載「王莽時代の鏡に就いて」)、私共はその實物の存するなきと、如上の點とから、盤龍鏡を以て直ちに王莽の作品とするに躊躇した。たゞ新に屬目した日向國谷頭發見の盤龍鏡が外緣の流雲紋から成つてゐる珍らしい實例から、同式鏡の既に後漢代にもあつたことを推測するにとどめ、依然として魏晉中心說を採つた次第である。然るに今や北鮮に於いて上記の新資料が見出され所謂盤龍鏡の整美なる式の漢代に存在した事實を示し、上に擧げた見解に補正を加ふべき必要を如實に表はすに至つたことは、私共に取つて一の重要なる發見と云はなけ

ればならない。

然らば比較的平面的な遺品の多い漢代諸鏡の間にあつて、此の種半肉刻な遺品の起源何れにあるかはまさに一顧の價値ある問題と思ふ。それに就いて注意に上るのは前漢代に行はれたと認むべき古き形式を備へた方形四乳草紋鏡に於ける獸鈕これである。該鈕は故富岡氏藏鏡の一例(古鏡の研究圖版第四五參照)の示す如く、方形格内に特殊の龍形を恰も背合せの如き狀態に浮彫的に表はし、胴部隆起して鈕を形成するもの、これを上記盤龍鏡の内區の獸形がすべて胴軀を缺き中央の鈕を以て、それに當てた配置を取つてゐるのと對比すると自ら其の間の系統關係が考へらるゝのである。而して細線式四神鏡の方形格の間に鈕を中心として獸形を配すること、例へば富岡氏藏の八子九孫四神鏡(古鏡の研究圖版第六の二)の如きがあり、また鈕の周圍に大きく表はし内區の主文樣の一部を形成するものに上に擧げた青盖四神鏡の如き著しいものあるによつて、漸次其の擴大發展した痕をも辿り得られる觀がある。かゝる諸點から推すと中山醫學博士が其の「鼉龍鏡に就て(考古學雜誌第九卷第九號)なる論文中に主張せられた、盤龍鏡の完成を以て後漢の初に遡らすべしとする高說はまさに傾聽に値するものと云ふ可く、また從つて高橋氏の擧げられた肖氏鏡を以て王莽代の作品とするにも强て反對すべき理由を持ち得ない事にもなるのである。

北鮮發見遺品の示すところに基き、所謂盤龍鏡に關する鄙見を今や上記の如く補訂するの適當なるを信ずるに至つたのであるが、それと同時に附記すべきは、この事が直ちに以て

盤龍鏡を以て王莽若しくは後漢の初の遺品に限ると云ふことを意味するものにあらざること是れである。今ま上に數へた北鮮大同江面發見の遺品に就いて見るも、第三號墳發見の一鏡の如きは其の外區の獸帶と內區の手法から考へ、また伴出の半圓方形帶神獸鏡の年代と比較して時代の降るものとす可く、初に數へた單形の類の如きも、同式鏡の起源を以て上記の如く解するに於いては、其の原形に近きものとなさんよりは、退化の一型式とするにより多くの合理的な點がある。これを別個の資料から觀察するも、貴志氏の傳ふる處に依れば、北京在住の某氏の許に漢末建安三年六月十五日の銘ある盤龍鏡ありと云ふ。未だ實物を見るの機會がないから確證とはなし難いが、氏に從へば形の整うた精品であるらしい。果して然らば同式鏡は漢末にも存したことになり、漢代を通じて行はれたと共にその或物が魏晉にも及んだことが考へられる次第である。

夔鳳鏡と糸卷形禽獸鏡とは共に平面的な表現法を取つたもので構圖上から兩者が密接な關係を持つことは容易に考へられる。然し其の系統關係の如きは何れが原形式に屬するかを輕々に斷じ難い。糸卷形禽獸鏡の第一に擧げたものゝ如きは一面に單形な內行花紋鏡の式を傳へたところがあり、糸卷形圖に蝙蝠形座の發展を跡附け得るものを存し、また內區の圖樣も巧みに布置せられて古い形式なのを認めしむる點はあるが、自餘の遺品に至つては、其の形式化の著しいものを含み、該式から複雜な內區を有する夔鳳紋鏡に發達の經過を辿らんとする相對的年代觀を立てることに困難を感ぜしめる。蓋つて夔鳳鏡の年代

を檢するに、其の主文樣とする夔鳳紋は先秦の古銅器に最も豐富に使用せられてゐる處のものであるのと、同式の遺品が我が北九州に於いて前漢鏡の特徴の著しいゴシック式銘帶鏡及び銅鉾銅劒の類と共存するの事實などに依つて、漢鏡中最に古い形式の一とすることはほゞ學者の一致する見解と云つて可い。されば糸卷形禽獸鏡を以て該式から出た一つの流れであると解して大なる支梧はなからう。然らば上記北鮮出土の夔鳳鏡はすべてこれを前漢代に比定すべきかと云ふに、既に早く故富岡先生の注意に上つた如く、夔鳳鏡には他方に於いて遙かに後の代までも行はれたことを立證する遺品があるので、一々に就いて考査を加へた上ならでは固より速斷し難いのである。先づ是れを白神氏所藏の精品に就いて見るに、特記す可きは漢永壽二年の獸首鏡との間に存する一致である。兩者は各の名稱の示す如く、其の主文樣に於いて相同じからざるものなるも、其の平面的な帶圈の布置をはじめ、鋭利な線刻の度合と、兩者の示す斷面形の全然同軌に出づるのは、ほゞ同じ時代の鑄造に依る現象と解するを以て最も穩當なりと思ふ。

右の相似に對して更に興味を加へるのは、橋都氏藏加鵲里出土の一鏡に見る浮彫紋のある鈕とほゞ同一のものを桑名鐵城氏所藏の獸首鏡のそれ(「古鏡の研究」圖版第十二)に見出すことであつて、兩樣の平面鏡の相並んで行はれたるべきことが右の點からも推測せられる。獸首鏡が後漢の初に完美な形式の成立を告げ、爾後漢代を通じて行はれ魏代に及んだ事は年號銘ある遺品の存在に依つて今やほゞ確められたから、其の年代觀は推してまた相似の

多い夔鳳鏡をも律し得られやうかと考へる。かゝる見地に立つて實例の最後に記した、前二者よりも文様の形式化した、黄海道鳳山郡發見の鏡片を考察すると、更に發明する處が多い。該鏡片の見出された墳墓は關野博士、谷井學士が認めて帶方の遺跡となすもの、而して右の考定は遺跡の地理的位置よりし、また附近に於ける考古學上の事實に基いての立論なるを以て多くの人士の據らんとしつゝある處のものである。然らば其の内に藏した遺品は大體に於いて同郡の設置せられた漢末三國代のものとす可く、該夔鳳鏡片また自ら同じ頃の鑄造と見なければならない。こゝに表はれた推定年代と遺品自體の示す手法とから生ずる歸趣は如上の推測説から當然導き出すところのものに外ならず、其の確かさを傍證する一の重要な役立をなすものである。

以上の四者に對して畫象鏡をはじめ、半肉刻表現の諸鏡は割合に遺品が少く、それに直接年代の推測を加ふべき據所となる考古學上の事實の伴ふものに乏しく、僅かに黄海道文井面から出た六獸鏡が、發見遺跡の帶方のものとする推定から、年代觀に若干の限定を加へ得るのと、林仁普の發掘した二神二獸鏡が上記糸卷形禽獸鏡と共存し、また内外兩區間に一條の突帶ある四獸鏡の内行花紋鏡と伴出した事實に基く推測の可能を考へられるに過ぎない。さり乍ら本來この類は支那に於いて年號銘ある遺品を見るものであり、また我が内地の古墳からも大形の精品を發見するを以て、從來研究者の注意により、關係の論著が少くない。今ま中で私の傾聽しつゝある故富岡先生の年代觀を摘記せむか。先づ畫象鏡は其の

特殊な表現法が後漢代に盛行した畫象石刻のそれを移し來つたのみならず、表はされた人物其他の畫象また石刻のそれに酷似してゐる處から該形式の起源を考ふ可く、他方其の銘文の書體と、精品の一に吳胡傷里なる地名の存する點などから推し、その內區に表はされた圖樣の性質を考査することに依つて、同式鏡の完成蓋し漢末三國の世にあり、以後六朝に亘つて行はれたと解す可く、半肉刻神獸鏡及び獸形鏡の二者また鑄造の年代がほゞ同じ道程を取つたであらうことは、後漢の中平六年の獸形鏡の示す手法や、三國六朝初期に多い半肉刻的な神獸鏡との對比からこれを確めることが出來る。半圓方形帶神獸鏡は其の環狀乳を有する內區のもの早く後漢の年號鏡にこれを見るのであるが、外區に繪紋樣帶を置くものに至つては西晉の泰始九年鏡にはじめて見るのであつて、それが六朝を通じて行はれた著しい形式の一であることを、鏡そのものゝ甚だ複雜なる點と、遺品に神像に代ふるに六朝式の佛の立像を以てした類のあることなどに依つて考へんとするのであつて、これは多くの研究者の一致する處である。

右の一般論に依つて上記北鮮出土品の年代また律すべきものと信ずるが、更に一々に就いて少しく比較を試みるならば、畫象鏡の形の全い二者は共に簡單な式に屬して、內地出土の大形品に及ばざるもの、また神獸鏡中關口氏所藏の梧野里土取場發見品は、其の獸形、上に記した漢の中平六年の銘ある四獸鏡のそれに近く、金汝周の發掘した四獸鏡は故富岡氏所藏の劉氏神獸鏡の獸形に酷似して、共に製作の年代を漢末魏代の頃に局限し得らるゝに近

く、神獸鏡中に神人を畫象鏡式の表現法に依つた一鏡のあることなど注意に上るのである。たゞ一面の遺品のみの大形の繪模樣神獸鏡は、同式として最も整美な大形品である點から、これを六朝代に入つてからの作品とするのが穩當であらうと思ふ。かくて推定し得たところの四類の年代何れも該形式中に於いて割合に年代の遡るものであることに歸着するが、この事たるや遺品の發見例の少ない事實と共に、漢の郡縣が漢末三國を經て六朝に入つて振はず、晉の建興元年に至つて遂に高句麗の爲に追はれて遼東の慕容燕に歸し、半島に於ける漢人の文化の跡を絶つに至つた顯著な歷史上の事實が遺物の上に同樣の現象を示すものに外ならないので、研究上まことに興味の津々たるところである。

七

さて前項で論究した年代觀に基き現存遺品數に依つて北鮮出土鏡を通觀すると、其の中には百乳星雲鏡、ゴシック式銘帶鏡、異式の內行花紋鏡、同T字式鏡等三四の前漢鏡としての古い特色を備へた實例を見るが、それは寧ろ數に於いて甚だ少いものであつて、發見鏡の大部分を占むるのは前漢から後漢に亘り盛行した各種の內行花紋鏡と細線式の四神鏡系の二類に屬し、後漢代の作品と見る可き盤龍、夔鳳の兩形式これにつぎ、內に大形の精品が多い。次に後漢に起り三國を經て六朝に亘り行はれた半肉刻神獸鏡類に至つては再び數を減じ、而して出土品は該形式中比較的古調を帶びたものなるを認め得るのである。この事は、恰

も吾々が支那の文獻に依つて知ることが出來る韓半島に於ける漢の郡縣の存在した時期と盛衰とに一致する點に於いて特記に値する。尤も上來數へた資料はなほ極めて不充分なものであるから、將來遺品の增加につれて、別個の事實の明にせられる豫想を容るゝ餘地のあることは固よりであるが、百二十面を超ゆる現在の遺品が何等の意圖を持つことなく、各地から一面二面と一樣に集められた割合に多數古墳の副葬品の集積である點からして、其の示すところ大體に於いて北鮮の墳墓に埋められた古鏡の性質を反映してゐると解して誤りがなからうかと考へる。從つて如上の示すところに種々の考察を加ふることも自ら理由づけられるわけである。一例を擧げんか、既記の如く前漢末から後漢に亘る古鏡中に優秀品の多いと云ふことは、半島に於ける漢の文化が其の期間に最も光輝を放つたことを意味するものと解すべきが如き是れである。

轉じて如上の現象を支那古鏡鑑沿革研究の上から見るに、寄與するところの示唆また甚だ少くない。例へば年代論の條に說いた一般盤龍鏡に關する見解の補正に對する役立ちの如きをはじめとして、こゝに內行花紋鏡と細線式四神鏡の類とが最も多く、全數の各三分の一を占めてゐるとは、人をして兩者が漢代に盛行した著しい形式なのを推測せしむると共に、前者が其の豐富な遺品の裡に、該形式發達の痕を辿り得る諸例を含む點に於いて看過すべからざるものがある。また出土鏡の全體を通じて見る時に、此の期間に於ける鏡緣の形式の變遷と、所謂三角緣なる特殊の形の發生を辿り得るが如きことも、吾々には一つの重

要な事項でなければならない。今まで既述の年代順に從つて一々の緣を檢すると、古式の內行花紋鏡にあつては、其の素緣は隆起著しからず、夔鳳鏡のそれが內區とほゞ同一水平面の延長なのと大差なき式に屬してゐるが、該式の整美な遺品となるや、明に突起した幅廣い素緣を形造り、外端稍厚さを加へたもの、四神鏡にあつては高さを加へて全くの平緣となり內に文樣を配して外區をなしてゐる。盤龍鏡は同じ系統に屬するも、內區の半肉刻の表現に應ずる意味よりか更に其の厚みを增して、外區中の周緣のみ內行花紋鏡の完美品に似た小隆起が表はれてある。半肉刻の二神二獸鏡は同じ特色の更に著しいもので、一轉すれば三角緣となる傾向が明に認められる。右の類とは別に四神鏡系の內區の簡單になり若しくば變化した式にあつては、外區が文樣のある分と素なる眞の外緣との區別が見られて、其の後者に突起を示し、白神氏藏の梧野里出土品の如きは全く三角緣をして、畫象鏡や獸形鏡に見ると同じ特徵を備へてゐるのであつて、そこに漢から魏晉までの間に於ける鏡背の一主要部分を構成する緣形の推移が考へられ、また從來解釋に苦しんだ我が內地發見の神獸紋に顯著な三角緣の、基くところの平緣にあることも推測せしめて、形式學上の研究に寄與する次第である。同じ樣な形式上からの考察はこれを內區の構圖の變遷にも見ることが出來るが、それは省略するとして、なほ別個の點にて重要な意義を有するものは內地に最も多い大形三角緣神獸紋の類が北鮮の出土品に殆んど見當らない消極的の現象に基づく該式鑄造年代に關する推測であつて、それが從來學界に異說の多いものなるに於いて其の感が

深い。然し右の考察は內地出土鏡との比較から出發するを便利とするから次項に讓らう。

八

北朝鮮發見の古鏡の性質の考査に當り、次に論ずべきは其の南鮮及び內地發見の遺品との關係であらねばならぬ。云ふまでもなく兩者は其の地理的位置の關係よりし、また記錄の敎ふるところに本き、古く同じく支那の文化の影響を受けたことは毫末の疑もない。然し古代朝鮮にあつては、高句麗、百濟共に早く唐兵の爲に主要なる墳墓を發かれて、今日殆んど副葬品を存するものなく、南鮮の遺跡に於いては新羅、伽倻の兩者とも其の墳墓には金色粲然たる裝身具をはじめ、珠玉、各種の容器、馬具等頗る豐富なる副葬品を藏するに不拘、如何なる故にや殆んど鏡を見ない。從來出土した遺品としては僅かに永川郡琴湖面に於ける小鏡類と、慶州郡入室里發見の細線鉾蒲綠鏡、及び晉州の古墳發見の變形獸帶鏡一面に限られ、未だ一般の性質を考へ得るに至らず、永川出土品中に所謂四乳鑑とゴシック式日光鏡とがあつて、北鮮のそれとの關係を想定せしむるに過ぎない。內地の古墳は右の點からすると甚だしい相違を示すものと云ふ可く、古鏡が副葬品の主要部を占むることに於いて北鮮の漢墓と全然一致するのであつて、內に確實なる支那鏡を含むところから、兩者に如何なる異同ありやの問題を生じ、それが兩者の何れからする考察にも必要となる次第である。

我が內地の墳墓から發見する古鏡はこゝで事新しく論ずるまでもなく、支那から舶載し

た彼地の製作品と、それに基いて邦人の鑄造した類とを含むことは學界周知の事實であつて、其の數量の上に於いて實に兩者相半ばするの狀態を示してゐる。されば此の點で殆んど支那の作品のみの北鮮發見品と一つの著しい相違が見られるわけである。尤も所謂仿製鏡の類も北鮮で絕無でないことは上の記述中に注意した處であるし、またそれが內地の同式品に深い關係を持つものなるは既に「藝文」誌上に說き及んだが、然し兩者を同一視し得ないことは到底否み得ざる處であつて、それが支那の郡縣ならぬ內地の上古の文化相の一つの表れに外ならない。但し今まは所論の岐路に入ることを避ける爲に、右に關聯する推究を割愛して、直ちに兩者に共に見る支那鏡の比較に移らう。

先づ初に內地出土の支那鏡に上來數へた北鮮出土品に見ると同じ形式の遺品ありや否やを比較するに、大體に於いて同じ類の存在が認められる。尤も古い星雲鏡やゴシック式銘帶鏡、細線式四神鏡の如きは、北九州に於ける銅鉾銅劍にて表徵せられる特殊の遺跡發見のもの主な部分を占め、此の遺跡には雷紋鏡其他の北鮮に見ない類をも含むが、自餘の多くの式は我が上代の高塚の副葬品に存在してゐる。今ま其の著しい類を數へると、星雲鏡に伊勢の出土品あり、ゴシック式銘帶鏡の完美して內行花紋帶の大きくなつた式は讃岐、大和等に其例を見る可く、四乳双禽鏡は紀伊の椒濱から完好な遺品が發見せられてゐる。北鮮に最も多い內行花紋鏡にあつては、複雜整美な形式が山城、大和、攝津、播磨等の發見品七面を數へ、單形式の類また出雲、伊豫、讃岐等に四面の存在を見る。但し兩者共にやゝ形式の便化

した類が多いのは注意すべきである。細線式四神鏡は伊勢と大和とに流雲緣紋の精品二面があり、また其の系統に屬する獸帶鏡の大形品を和泉、河內、攝津、美濃、豐後等に見るが、北鮮に比して割合に少い。夔鳳鏡は筑前にて銅鉾銅劍と伴出した一例の外、攝津にて一面と伯耆にて大形の精品一面とを數へ、北鮮に見ると同一の盤龍鏡には簡單な式が山城、近江に於いて、また精美な銘文の存する類は河內、近江、備中等から發見せられてゐるが、別に上記の中にない三角緣を持つ大形の一式が、近江、周防、筑前、豐前、上野等に存することは特異な點として擧ぐ可きであらう。是等の諸鏡に對比して畫象鏡以下の諸式に至つては內地の出土品が頗る數を增し、且つ精品の多いことが甚だしく眼に着く。一例を擧げるならば畫象鏡の如き北鮮にては今日までの發見例僅かに三面に過ぎず、而もそれは小形の類であるに比して、我が古墳出土品は大部分徑六寸を超ゆる大形品に屬し、其の分布近畿から中國關東に亘り、私の實見したものゝみでも二十面に近い數を示してゐる。繪模樣神獸鏡の如きまた同樣であつて、本地域に唯だ一面のみの大形鏡が、內地では山城、攝津、伊勢、遠江、上總、信濃、甲斐、上野、下野、備前、備中、周防、肥後、日向、讃岐等の各地に分布して二十面を超へ、同系統に屬する他の一面なる環狀乳式また內地の方が遙かに發見例が多い。以上內鮮兩地發見の支那古鏡の同形式品の比較に於いて看取し得るところのものは、兩者共に古い前漢代からの支那鏡を有する一致と同時に、北鮮發見の遺品は內地のそれに比べて時代の遡る前漢から後漢に亘る期間の作品多數を占め、且つ內に精品を含むに對し、內地發見品は、前者に少ない諸形式の

發見例多く、精良品に富むの現象を呈して、兩地發見鏡の各を特徴づけてゐる點である。此の事實は兩者出土鏡の基くところ同じ文化母體であることゝ、內地の地理的位置が韓半島に比して支那より隔たつた點から見て、尤も當然なことではあるが、さて兩者の特徴がかく遺物の上に規則正しく示現せられ、兩地が同じ頃から支那の文化を受け乍ら、各別個の時期に其の盛行を示すところに研究上の興味が感ぜられる次第である。

たゞ如上の相似に對して現在吾々の有する資料から兩者の間に著しい相違を示す事實の存在を次に記すべき要があると思ふ。それは內地出土の支那古鏡の大本をなすとも云ふ可き大形三角緣神獸鏡類の北鮮に發見例のない事是れである。此の種神獸鏡の內地に於ける出土數は其の出土地の確實なものゝみを數ふるも百三十面に近く、現存發見支那鏡の三分の一以上を占めて、北鮮發見の內行花紋鏡にも優るものあり、その分布は次の表に示す如く近畿に最も濃厚にして兼て廣く全國に亘つてゐる。

近畿	七十五面	本州中部	十三面	關東	五面
四國	三面	中國	十七面	九州	十六面

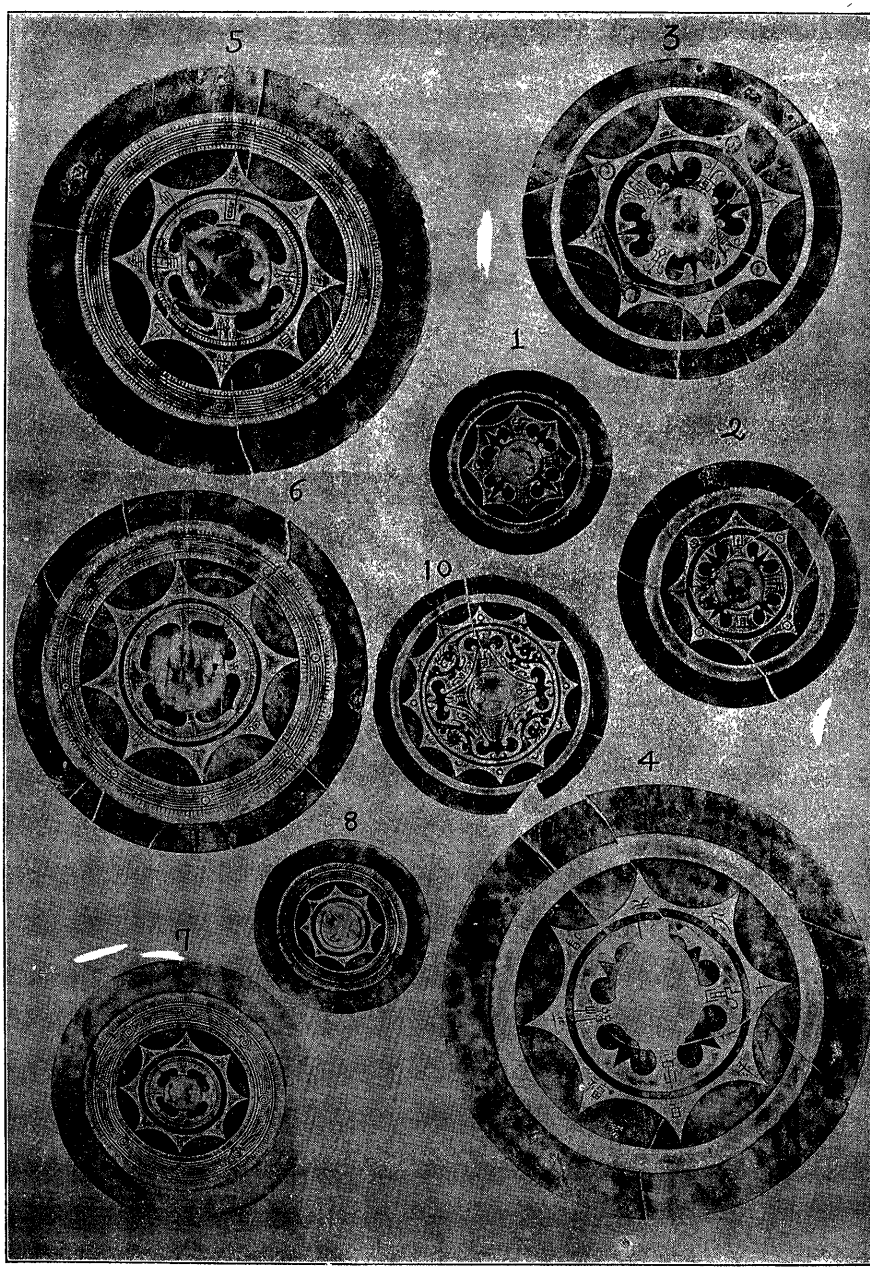
こゝに數へた該形式鏡が支那の製作品なることは、其の大部分に印する銘文に依つて容易に斷じ得る處で、疑を挿む餘地がない。繰返して云ふが、吾人の有する北鮮出土鏡の資料はなほ充分とは云ひ難く、將來の發見に對する豫想を否み得ないが、既に百二十面を超ゆる比較的多數の中にこれを見るなく、獨り內地にのみかく多數存することは兩者の著しい相

違と見るべく其の如何なる理由に基くやは考究を要する問題であつて特に同鏡を以て一部學者が王莽を中心とする時代の作品なりと斷ずるに於いて其の感が深い。この解釋として吾々は二つの場合を考へ得る。其の一つは如上一部學者の年代觀を是認する立場からするものであつて、是等の遺品は交通路の關係から支那より直接に內地に齎され、而して當代行はれた自餘の式と別系統の作品なるに依り北鮮に見ないのであるとする推定であり、他の一はこれに反して該形式鏡の鑄造年代が主として漢以後にあるが爲に、前代に榮えた樂浪の遺跡にこれを發見せないとする解釋である。二者の中で後者の方が自然であるが同時に平凡な見解とも云ふべく、前者はやゝ突飛な感はあるが一つの面白い推測說として、我が島帝國の位置から考へ、また古く前漢代に北九州に擴がつた甕棺なる特殊の墓制が丹陽山南楊子江下流の地にも行はれたことを徵證する文獻の存することに依つて、其の可能を思はしめる。然し乍ら熟慮するに此の見解の成立にはどうしても(一)王莽代に早く韓半島を經由せない支那から內地への割合に顯著な交通路の存在したこと、(二)北鮮出土鏡が支那當代に普通な形式であるから、それの作られた西安や洛陽以外に、別に本形式に見る樣な別個の精品を多數に鑄造した他の一地域のあつたことを肯定せなければならない。がそれが果して漢代に於ける東亞の大勢からその可能を認められ得るだらうかどうかは大なる疑問であると云はなければならない。第二の點は大形神獸鏡の最も整つた形式である所謂徐州鏡に、該遺品が徐州の銅を取つて當代文化の中心なる洛陽の鑄工の作つたこ

とを明記してゐるから、假りに別個の輸入の徑路がありとするも、同式のみが朝鮮の郡縣に齎されなかつたと見るべきことは甚だ妥當を缺く。云はんや第一の條項に就いても、一つの同じ土俗の存在から直ちに斯くの如き多數の遺品の舶載を見る交通路の存在を想定することはやゝ早計であらう。支那古代の文獻の示すところ、すべて倭は韓半島に附隨した形に錄せられ、魏志載するところの交通路は明に樂浪を經由してゐるのであるから、漂流などの場合は別としてそれに先立つ二百餘年も前に、かくの如き著しい結果を齎した直接の交通路があつたとするのは、如何にも不自然であり、また考古學上よりする當時の內地に於ける一般文化の趨勢からも同じ樣な疑念を挿み得る次第である。第一の解釋が當らないとすれば當然右の現象を解くものは第二のそれであらねばならぬ。これを形式の上から見るに北鮮出土の古鏡中に既に擧げた如く平緣式小形の神獸鏡があり、また一部分三角緣を持つ古鏡をも存し、前項に說いた緣の形式の變遷から推して、次の代に大形の同式緣の發展を考へることが甚だ自然であるのをはじめ、畫象鏡の示す事實や、盤緣鏡の發展して大形三角鏡となつたものを內地に見ることなども同一傾向を示すものとして同じく其の解釋の穩當なのを物語る一例證となし得やう。而して樂浪郡に於ける漢の勢力の漸次衰滅に近づいた魏晉に於いて倭の耶馬台國が彼に通じ多數の遺品を舶載した記錄の存すると相表裏して最も有力に價値附けられる。果して然らば、このことは其の年代觀に容易に一致し難い二つの違つた學說のある我が三角緣の大形神獸鏡に於いて、其の一たるそれを王莽

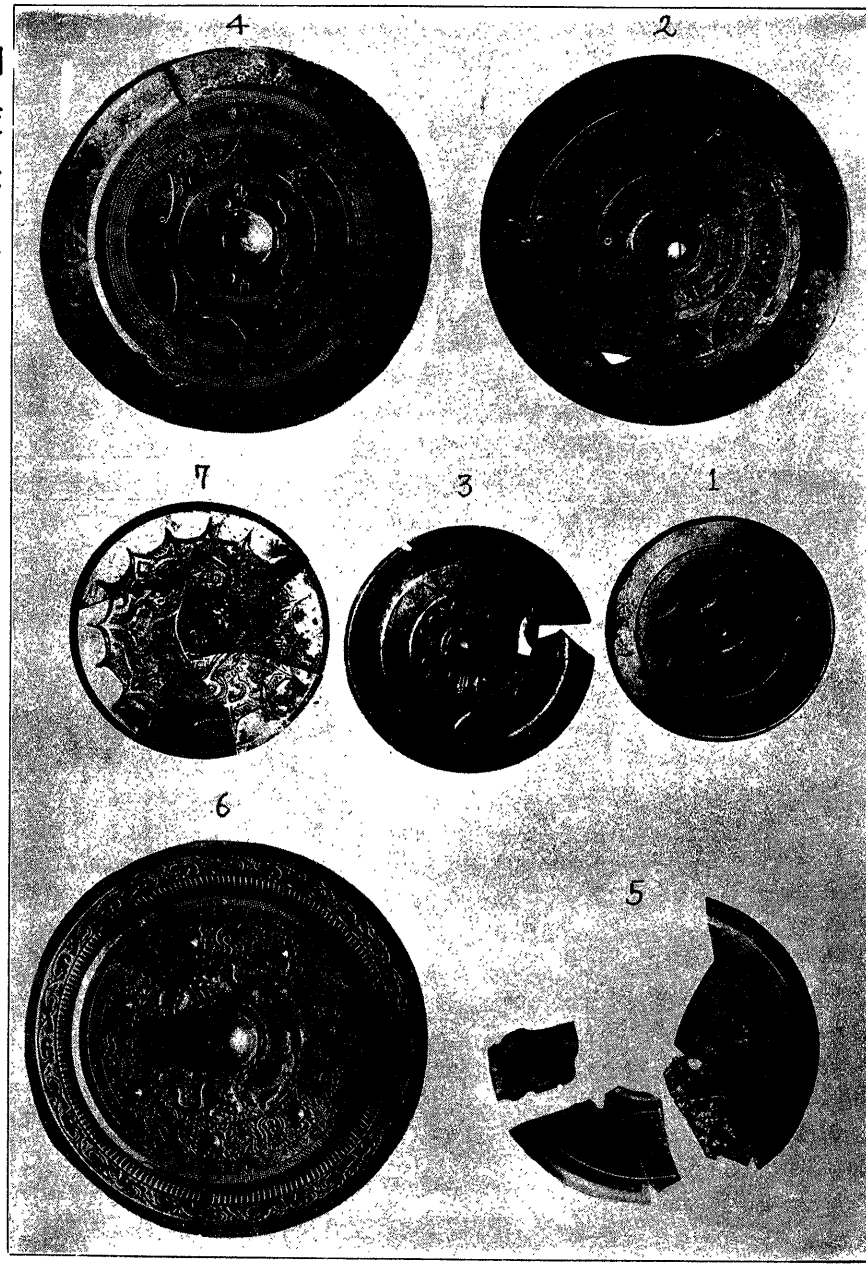
圖版第一

平安南道大同江面發見內行花紋鏡類拓影



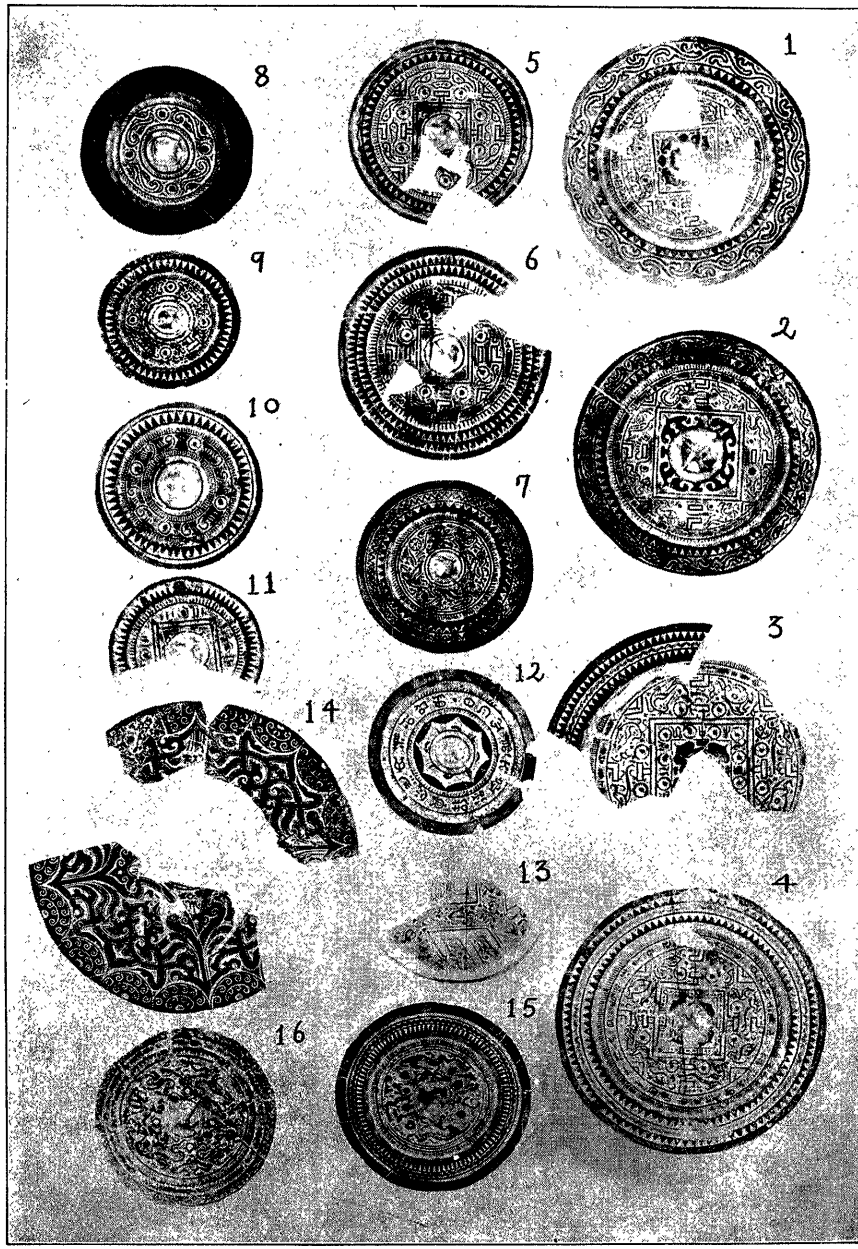
圖版第二

北朝鮮發見支那古鏡類（其一）



圖版第三

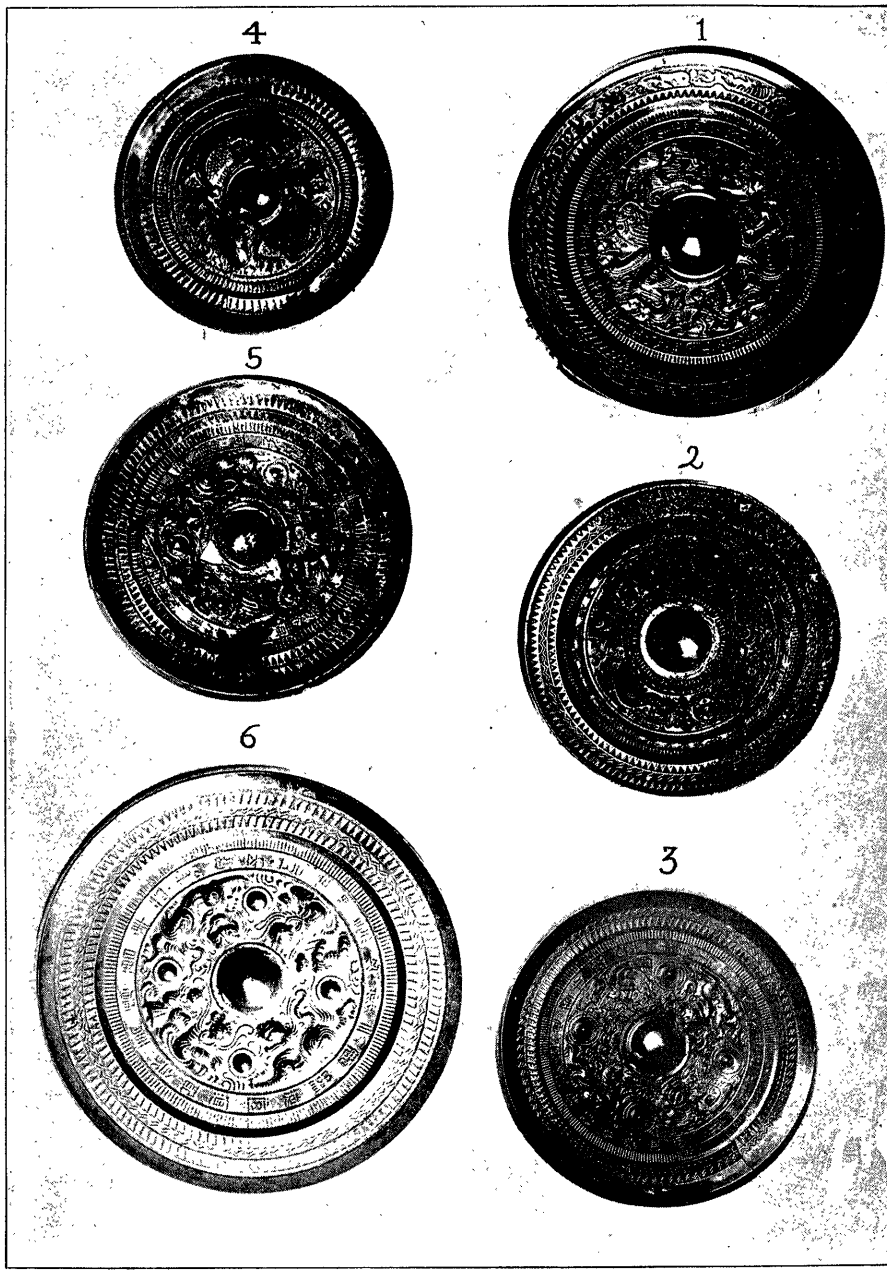
北朝鮮發見支那古鏡類拓影



圖版第四　北朝鮮發見支那古鏡類（其二）

圖版第五

北朝鮮發見支那古鏡類（其三）



代のものとする見解は、如上の北鮮に於ける考古學上の事象と合致を缺くものであるに對し他の魏代を中心とする時期の作品と見る故富岡先生の提唱せられ、私共の據りつゝある年代觀の妥當なことが立證せられるわけになるので、特に興味が深い。是れ亦北朝鮮出土鏡の形式調査が齎した消極的の一結果として特記すべき點である。

北鮮の古鏡と內地のそれとの比較に於いて、兩者が墳墓內に於ける埋葬位置の相違の如きも一の著しい點として數ふべく、內地にありては鏡が直接遺骸と共に埋藏する場合多く、其の副葬品としての占むる位置は初に記した北鮮の場合よりも甚だ相重いものがあつて、右の考察から上代日本人の鏡に對して有つてゐた思想や信仰が北鮮の漢人と違つたもののあるのも明確に出來る樣に思ふが、やゝ本題とは關係の少ない事項に亘るので他日の機會に讓らう。

要するに上來記した處、北鮮出土古鏡を論ずるものとしては稍年代論のみに偏した次第であるが、支那古鏡の沿革の確立が現在に於ける我が考古學的研究の基準となりつゝあるもの多きに鑑み、併せてそれが又北鮮に於ける遺跡の更に細部に亘る研究に對しても寄與する所あるべきを思ふて縷述した事である。結末に當つて本資料の蒐集に當り總督府博物館の藤田鑑査官、小泉囑託を始め京城師範學校主事白神壽吉氏、平壤在住の關口半氏、諸岡榮治氏、田增關一氏、鳥飼生駒氏、橋都、岡本兩氏等の好意に負ふ處多きを明記し、特に諸岡氏が遺品の調査と寫眞の撮影とに多大の援助を與へられたことに對して衷心の謝意を表したい。